

# 研 究 紀 要

## 第 14 集

### 報 告

我校の高校生心理状況……………出野上 良 子…1

### 研 究

中学英語教科書に現われる……………中西正三…7  
動詞の実用性の比較研究(その一)……………吉岡一郎

「高村光太郎」ノート その八……………井田康子…1  
— 高村光太郎と永井荷風と(Ⅲ) —

1972

奈良女子大学文学部  
附属中学校・高等学校

# 我校の高校生の心理状況

出野上 良子

無気力・無関心・無責任の三無主義、教師と生徒との断絶、学校生活の退廃化、生徒の政治活動、受験地獄、予備校化等、多くの高校生について語られる言葉がある。これらの言葉は“使い古されたような感じ”を伴って私に対峙している。が、生徒達が自分達の高校生活をどのように考え、悩み、どのように生活しているのか、また、どのように生きようとしているのかを、高2の授業（保健）3年間を集約して、付属校というエリート学校（県下での一流校）での、生徒達の現実の姿を、本稿で少しでもうきぼりにできればと思う。

## < I 中学生生活 >

高校生活を述べる前に、付属高校に110名進学する付属中学の現状について触れよう。

付属中学は、今まで付属小学校約60名、外部の小学校約75名という枠で入試選抜が行なわれている。県下の小学校の選り抜きが我が校をめざし十数倍の難関をくぐって入学してくる。彼等はその時、何を感じたのだろうか？

『中1入学当時、僕には誰一人知り合いはなかった。2か月もすればクラスのみならず自然に親しくなれるだろう、それまで寂しいが我慢しようと思い、学校に来ていた。ところが、一、二か月経っても調子がおかしい。ますますクラスメートは冷たくなっていくみたいだ。もちろん教師は冷たい。何という奴らだ。同じ人間だという気が起こらぬ。僕はもうここで自分自身を「一人地獄に落とし込まれた最も残酷な刑——無視——をもっていじめられている哀れな人間」として自己憐憫をもって甘やかす、他方、学校の全てを、両親を我が憎むべき敵として恨んだ。なぜ、友達になれないのだろう。当時の僕としては、そこに集まった奴らが各校選り抜きの鬼であるからとしか考えられなかったのは無理からぬことじゃないか？……「こんな学校の奴ら誰もはじめから信じなかったらええのや。あんな奴らこっちから無視したる。いくらあいつらが無視しやがってもへこたれへんぞ」という理論を得た。陰湿な歪んだ心から出る逃避へと一変した。登校途中のあの子の不愉快な市内循環のバスの中で、先の言葉を呪文のように唱えた記憶は生々しい。』

『中学に入って一人で一時間もかかって、学校へ行かねばならなかった。今までみんなにちやほやされていた私が一人になった。ひとりぼっちになった。一人で勉強するほかなかった。いろんな事で自分が相手にされないことをすこし悲観するようになった。……あまりにも頭の良い人達が集まりすぎている。素直に自分が表現できない。自分の内部を必死に他人に見破られないようにした。』

県下の一流校とみなされている付属高校の前段階である付属中学校をめざして、彼等は遊びたい

さかりの小学校から、個別に教師から特別の指導を受けたり、塾へ通い、受験問題集を夜遅くまで解き、必死に自己を駆りたてるのである。だが、勉強することで良い成績が得られる小学生達はそれなりのはりあいも優越感も持ち、目的に向かって努力する。しかし一方、その過程で、彼等は友人を敵とみなし、切り捨て、教師、両親に対する不信任、はては自分に対する不信任までも増長させていくのである。

入学後、彼等は自己と同じような友人に囲まれ、小学校時代には優等生であり、リーダーであったという自らの拠り所を見失ない、“仲間がいない、味方もいない”という一人孤立した状況に押し込まれていく。『こんな学校の奴ら誰もはじめから信じなかったらええのや。あんな奴らこっちから無視したる。いくらあいつらが無視しやがってもへこたれへんぞ』という言葉で端的に表現されるように、友人に対する期待、信頼よりも、必死で自己を守ろうとし、自己のカラに閉じこもうとするのである。優等生を集めても、その良さが互いに働きかけ、関連しあい、引き伸ばされるのではなく、むしろ、窒息させられてしまう悲劇が彼等の現実であろう。“他校の選り抜きの鬼”“地域的関連の薄い者”に囲まれ、彼等は結局、中学生活が大学へいくための一つの段階でしかないということのをうすうす感じはじめるのである。

## < II 高校生活 >

そして高校入試がなされ、付属中学の二十数名が落とされ、外部から二十数倍の倍率で入学してきた新入生＝県下の中学生の超エリートをむかえる。末端を切り捨て、上層を入れるこの制度＝入試によって、彼等の悲劇は高校時代という自己の将来や人生にまつわる事象を今まで以上に自分の目でみつめようとする時期に一層、強まり続ける。

### 1 友人関係

『高校に合格しても、心の暗さは消えなかった。この俺自身こそが貪欲でエゴイスティックで信ずるに足りない人間どもの最も顕著な一例であると気付いたからだ。まわりの人間を下劣と決めつけるならおまえこそ下劣で存在する価値のない人間じゃないか?!』

『人間なんて、結局一人なんだ。人間と人間のつながりなんてすごく薄いものだし、それを頼りにしすぎると間違いだと思うようになった。』

『自分の将来について考えなければならぬぎりぎりの時期に来て、私はひとりとり残されてしまったような心細さとあせりを感じています。私は間近に迫っている高三＝灰色の受験生活、そして大学受験がそんなに遠い日でないことをぼんやりと意識したのです。ところが友達はそのことはとうの昔から気づいて、自分自身の道を求めて、そこに向かって歩きはじめていたみたいなのです。私はその時ほど友人と自分とのへだたりを感じたことはありませんでした。』

自己に対する不信任を基に、友人を見つめる彼等は、決して、不信任をぬぐい去ることはできず、友人へのより強い警戒心となっていく。日常茶飯事的な話題でしか、つかの間の友情を交流しあう

だけである。“親友がほしい。同じ悩みを、心の奥底を理解しあえる友がほしい。”とほとんどすべての高校生は叫んでいる。だが、結局、エゴイスティックな人間同士なのだという認識に彼等はあきらめをもって到着するのである。連帯感のない学校生活への不安を彼等はどのように打ち消そうとしているのだろうか？ ゆけるのだろうか？

## 2 余裕のなさ

『生活に焦点が無くなってきた。スカミたいな気分であることが多い。……やることに余裕がない。高校に入ってから格段に難しくなって、すべきことに追いかけ回されているようだ。』

『時間がいくらあっても足りない。学校で教わる内容が多くてむずかしすぎる。一日にせめて30分ぐらいボケーとする時間がほしい。』

『マッハのスピードですぎてゆく毎日』

中学生時代は、まあまあ余裕のあった彼等もその教育課程に必死についていこうと努力する。

『毎日、家へ帰って勉強して。……もっとやらんともっとやらんと考え、思いつめながら結局、何もできあがらずにいる。近頃は机の前に坐ってから乗りきるのにずいぶん苦勞する。自分を勉強に駆る時の言い切れぬ苦しさ、僕はこれに耐える。何にでも辛抱して生きる。それだけしかできない。』

しなければならないこと＝勉強＝自この将来を決定するものに彼等は疲れ、“生き生きしている自分”を見つけ出す場さえ確保できない自分を感じはじめる。何のための勉強なのか？と……。

## 3 勉強に対する疑問

『昔の自分はこうじゃなかった。まったく別な人間になってしまった。少し前まで僕はよく勉強した。そして、イヤだなあという気持は起こらなかった。しかし今では何もかもヤル気がしない。このままではダメだなあと思うが、この状況から抜け出せない。いや、抜け出そうとする気さえおこらない。』

『アー、今日も単調な一日が始まるのか。授業内容にはいる。セッセ、セッセと黒板を写し、問題を解いたりして。あくる日もあくる日も同じことの繰り返し。数学の問題を解いている時、英語の単語を調べている時、フーと「何のための勉強なのだろう、どうしてこんなにまでして勉強しなくてはならないのだろう。」そんな思いが脳裏をかすめる。』悩み考えてもその矛盾は解らない。それなら

『どうせ、考えたって解らぬことに悩む暇があれば、少しでも勉強して、より良い大学にはいることだ。』

と、ワリキル生徒も出てくるのである。

しかし、余裕のない彼等であっても、いやそうだからこそ、より積極的、躍動的な世界（生きがいをつかめる領域）に自らが没入することにあこがれを持つ。が、現実の自分達のみじめな姿をみつめて、彼等の葛藤はより深くならざるを得なくなる。

『冬期オリンピックの花形、フィギアの選手達は氷の精のように躍動するリズムに乗って、強く優美に踊る。その選手達の中には、15、16、17のティーンエイジャーが目立つ。練習時間1日に6時間とか8時間とか。氷に対するまさに執念のようなもの。しかし、それはそれだけに実を結び、人々を楽しませるに至っている。自分のために日夜、練習に励んでいる。身心とも成長することをめざして。私はみじめだった。私の全く見知らぬ世界。しかし、私はそのはるかに私の生活に恨やましいと感じるのである。平凡な一高校生が「何かをつかみたい」ともがいている。くい入るように見つめたスケートに彼女はどれだけその片隅で小さくなっている自分を見出したことか?!。』

将来の理想もすっかりぼやけてしまい、何の新鮮さも感じなくなってしまった彼等は、それでも懸命に現状から逃げ出す出口をさがそうともがく。

『実は言いたくてたまらないこと、叫ばずにはおれないことはいっぱいあるのです。震えてくる焦り、不安、怒り………ところがもうとことんまで追いつめられてどうしようもなくなった時、ふと気づくのです。大上段にふりかぶって吠えたてるのをやめて、ちょっと斜めに構えてみれば、けっこうおもしろおかしく生きてゆけることに。なんだかバカバカしいような、白け切ったような、それでもやっぱり心の奥底には何かしっくりいかないものが残っているのです。そこでまた、うじうじと、結局、自分は何にもやり切れないんだと、あきらめたような、居直りのような……。しかし、どう居直ったところで、やっぱり苦しいのです。だからこそ闘うしかないんじゃないか。ところが闘うのが苦しい。しんどくて、しんどくてたまらない。僕が言いたいことをたった一言で言い表わすとすれば、それは「苦しい、だから助けてくれ」になるのではないかと正直なところそんな気がするのです。』

『僕は、いつも逃げ出したい気持を抱いて歩いている。逃げ出すスキをうかがいながら歩いている。だけど、いつまでたっても逃げ出せない。』

現実の矛盾を真正面に据えて、それに取り組むエネルギーは、もはや、彼等にはない。“苦しい助けてくれ” “逃げ出したい” という気持へと傾斜していくが、決して、誰も彼等を助けられないし、逃げ出す出口も見つからない。そんな気持を霧散させ、一瞬でも忘れるために、彼等の中にはクラブ活動に活路を求めるものもいる。

#### 4 勉強とクラブ活動との対立

『私の生きがいは何かと尋ねられたら、単車、ロック、クラブと答えるでしょう。絶対に勉強などと答えないでしょう。私達は決められたコースをいやがおうなく歩まされている。その没個性的な画一化された“詰め込み教育”を受け、一夜づけで試験を受けて、勉強する。そうして、大学へ行って、どうなるというんや。………すべての俗世界のイザコザを忘れて、自分一人だけの世界にひたる。これを私は求めるのです。』

特に運動クラブの場合、かなりの疲労を感じながらも彼等は充実感——したいことをしている自分——を得ることができる。が、しなければならない勉強とクラブ活動との両立に、高二になれば、

より困難を感じはじめるのである。

『クラブを退却すべきか、せぬ方が良いかと考える。勉強の上で不利な点が多くなってきたからだ。中学の頃は一夜づけでもなんとか間に合った。しかし、高校になるとそんなわけにはいかない。「クラブをやっても家に帰って集中的に勉強すればよいし、その方が勉強にも力がある」という僕にとってはバカバカしいと思われる意見がある。とうていムリだ。練習を終えて、帰宅し、いざ勉強となると、もう9時、10時。それから勉強して何が頭に入るというのだ。一日の勉強で酔一杯。だが、クラブを続けたい気持も一方に十分ある。』

『クラブと勉強の両立については、そろそろ体力の限界であると認識しているのですが、さてやめるとなると悩むのです。』

真面目に自己の解放の場、自己表現の場を見つけ出そうと努力している生徒達も、勉強しなければならないという気持=受験の圧力から、決して、自由ではない。我校のクラブ活動のほとんどが高二の段階で終わってしまう事は、非常に残念なことではあるが、そのような現実にも、彼等のギリギリの歩みがあることを忘れることはできない。

『両立は単なる理想でしかない。各個人にも限界というものがある。たとえ、それが敗北であっても、どちらかの道を選ばなければならない。そして、もちろん、僕は勉強をとる。この学歴万能の社会を否定こそすれ、拒否することはできない。とにかくクラブをやめることは、単なる妥協ではないんだ、前進のための手段なのだ、僕は自分に言いかせる。』

今、やりたいことが十分になされないままに、しなければならない勉強へと、彼等は自分を自分の論理で説得して、駆り立てるのである。

## 5 高校生は“くだらない物体”なのか？

では、日常の学習の場——学校——で、充実感を得ることができる場を失ってしまった生徒達はどのようなのだろうか？

『僕は今、何事にも感動することができない。一時的な享樂ならあるけれど、それは生活のハリにはならない。すべての事が無意味に見える。僕には自殺する度胸もない。しかし、朝、目を覚めた時、いや、それ以前の眠っているうちに、何の苦痛もなく、何の意識もないうちに死ねるとしたら、そんな都合のよい方法があるとしたら、僕は死を希望するだろう。どうして人間はしたくもないことをして生きてゆかねばならないのだろう？……僕のアウトサイダーの動機はきわめて単純かつ幼稚なことから始められた。社会に順応していくための行為（主に勉強）をしているうちに、誰もが経験する“行きづまり”に出合った時、僕はそれを前向きに解決しないで、ヤケクソになって、一種のノイローゼになった。そういう状態で、数か月を過ごした時に考えたことは、すべてを捨ててしまえば、この憂鬱な精神状態から解放されるのではないかということである。完全にそれを達成できれば幸せだったろう。しかし、それを完全に達成するということは「死」以外にはありえない。それをする度胸もなく、ただ、中途半端な状態でもがいているうちに僕は今のような“くだらない物体”になってしまったのである。未来への展望なんか何一つない。』

様々な苦しみ、矛盾を何一つ前向きに解決することを具体的に知らない、又、知らされない状況が極限まで達した時、自殺への志向が、にょっきりと首をもたげる。でも死ぬことができず、現状も解決できずに、もがいている彼等は、自己を“くだらない物体”としか認識できないほどのギリギリの状況へと追い込まれる。本来、期待と不安が入り混じって動く彼等の未来というものが、既に、あきらめを必要とする定められた大きな壁としか彼等の目には映らない時、未来に対する確信のなさ、生きてゆくうえの展望のなさへと帰結することは当然であろう。彼等をここまで追いつめ、驚くべき言葉（“くだらない物体”）までも、彼等の口からはかかせたものは一体、何なのだろう。

単純な要因ではなく、様々な条件・原因等が、相合・相乗されている現実に対して、私達教師は、彼等にどのように、この展望を示すことができるのだろうか？ しかし、展望を示す糸口をさぐらない限り、私達も又、現状に埋もれた“くだらない教師”でしか、あり得ぬことを自分に言いかけ、本稿を終える。機会があれば、次回に、その糸口をさぐる手だてを考察したいと思う。

# 中学英語教科書に現われる

## 動詞の実用性の比較研究 (その一)

中 西 正 三  
吉 岡 一 郎

### I はじめに

昭和 47 年度から中学校の新学習指導要領が実施され、それにもなつて中学校の英語教科書は大幅に改訂された。

昭和 46 年の秋に新教科書を選ぶにあつて 5 種類の新教科書を比較検討したが、その際にいちばん重点をおいた観点の一つは動詞のあつかいかたである。それはかねてより英語教科書の動詞については、違った角度から精選されるべきだと考えていたからである。

「指導書」によると動詞は 116 の必修語が指定されているが、その他の動詞の数と種類を興味深くみた。また各教科書であつかわれている動詞そのものが、必修語であるといなどを問わず、頻度の高いしかも平易な語であるかどうかを念入りに調べた。

その結果、本校では新しい使用教科書として Everyday English (中教出版) を採択したが、この際に、中学校で使用される教科書のなかの動詞を比較調査して、今後、生徒の言語活動をより实际的、より充実したものにする手がかりにしたいと思った。

調査の重点をとくに動詞に限定したのは、動詞が Sentence Pattern の中心であり、中学校の英語学習においては、「動詞をマスターできれば英語がわかった」といっても過言でないからである。

また一方、わが国における英語教育の効果があがっていないとの指摘もあるが、実情をいえば、各科目の負担が大きい、1 クラスあたりの人数が多い、英語の標準授業時数が少ないなどの不利な条件のために、生徒たちの学習効果はあがらないでいる。

したがって、この不利な条件のもとでは、教材はできるかぎり精選されなければならない。語彙についても、基本的なものを学習させるように細心の配慮を必要とする。

新学習指導要領では「身近かな」英語が強調されているが、各教科書では、それがどのように具体化されているか、動詞については、どのようなものが使用されているか、またそれらの動詞がほんとうに「身近かな」ものであるかどうかはきわめて興味深いところである。

動詞については、その種類とそれがどのように使用されているかが問題になるが、ここでは、その種類に限って調査をすすめた。

### II 調査のねらい

「はじめに」で述べたように、この調査は新学習指導要領に準拠した 5 種類の中学英語教科書で

使用されている動詞だけを対象としたものである。

各教科書の第1学年用から第3学年用のすべてに使用されている動詞をまとめ、各教科書間の動詞の種類を比較検討した。その結果、動詞の種類総数は、必修語をふくめて276である。ただし、have と be について、「指導書」では、必修語としてその変化形があわせて示されているが、それぞれ1種類と数えた。

ところで、必修語以外の動詞については、各教科書によって種類がさまざまである。したがって、これら276種類の動詞が、英語学習に比較的好く利用されている初級用辞書や会話教本など9点(表1参照)に収録されているかどうか、すなわち、教科書に使用されている動詞がどの程度基本的な英語であるかを調べてみた。

比較対象として英米人によって編集されたものばかりをとくに選んだのは、新学習指導要領の「身近かな」という観点と英米人のそれとを比べてみるのが重要であると考えられたからである。

### III 調査の結果

#### (1) 教科書の動詞

表 I 中学校英語教科書に使用されている動詞

動 詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
1. ache		○					○		○						
2. add					○	○	○	○			○	○		○	
3. agree		○	○			○	○	○	○			○	○	○	○
4. allow		○				○	○		○			○	○	○	○
* 5. answer	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
* 6. arrive	○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○	○
* 7. ask	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8. attend			○				○		○			○		○	
9. bake	○	○				○	○	○	○			○			○
*10. be	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
11. bear(born)	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○
12. beat	○		○	○		○	○	○				○	○		
*13. become	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○
*14. begin	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
15. believe		○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○

動 詞	調 査 対 象					S T		D C								
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR	
						a	b									
16. belong				○		○	○	○	○			○	○			
17. bloom			○				○					○				
18. blow			○			○	○	○	○		○	○				
19. borrow	○		○				○			○		○	○	○		
20. bother				○			○		○	○			○		○	
21. bow			○				○		○			○				
*22. break	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
23. breathe		○				○	○	○	○		○	○				
*24. bring	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*25. build	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
26. burn	○	○				○	○	○	○		○	○	○	○	○	
*27. buy	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*28. call	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
29. camp				○	○	○	○									
30. care		○		○			○	○	○	○		○			○	
*31. carry	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	
*32. catch	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
33. celebrate		○					○		○	○				○	○	
34. change	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	
35. cheer			○		○	○	○		○						○	
36. choose			○			○	○	○	○			○	○	○		
37. circle		○					○	○								
*38. clean	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	
*39. climb	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○		
40. close	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
41. collect		○		○		○	○			○		○	○			
42. color			○			○	○	○	○							
*43. come	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
44. command					○	○	○		○							
45. continue				○		○	○		○				○	○		
46. control		○					○				○		○			

動 詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETPT	WE	LE	LIN	COR
						a	b								
47. cook		○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	
48. count	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
49. cover	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○
*50. cross	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	
*51. cry	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
*52. cut	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*53. dance	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
54. decide			○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○
55. decorate		○					○		○						
56. design				○							○				
57. develop				○			○		○		○	○	○		
58. die	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
59. dig		○				○	○	○				○			
60. discuss		○					○		○				○	○	
61. discover	○		○		○	○	○		○	○	○	○	○		
*62. do	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*63. draw	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
64. dream	○			○			○		○			○			
65. dress			○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○
*66. drink	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
*67. drive	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	
68. drop			○			○	○	○	○	○		○	○	○	○
*69. eat	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
70. end		○		○		○	○	○	○		○	○	○		
71. enjoy	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
72. enter	○			○		○	○	○	○	○		○	○		
73. envy		○					○								
74. escape				○		○	○					○			
75. excuse	○	○			○		○		○	○		○	○	○	
76. explain				○	○	○	○		○	○		○	○	○	○

動詞	S T					D C										
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR	
						a	b									
*77. fall	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
78. fear	○		○			○	○				○	○			○	
79. feel	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
80. fight			○		○	○	○		○			○	○			
81. fill		○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	
*82. find	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*83. finish	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
84. fish	○	○			○		○					○				
85. fix	○					○	○	○	○	○	○	○		○		
*86. fly	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
87. fold				○		○	○	○	○							
88. follow				○		○	○	○	○			○	○		○	
*89. forget	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
90. fry	○						○								○	
91. gather	○	○				○	○		○			○	○			
*92. get	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*93. give	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*94. go	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*95. grow	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
96. guide		○					○					○				
97. hand		○			○		○		○			○				
98. happen	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
*99. have	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
100. head					○	○	○		○						○	
*101. hear	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*102. help	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
103. hide			○	○	○	○	○	○				○	○		○	
104. hit	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
*105. hold	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*106. hope	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	
107. hunt	○					○	○	○				○	○			

調査対象 動詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
108. hurry	○	○	○		○		○	○				○		○	○
109. hurt		○		○	○		○	○	○	○		○	○	○	
110. impress			○				○								
111. injure		○					○			○		○	○		
112. interest (interested)	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○		○
113. introduce			○	○			○		○			○		○	
114. invent	○		○	○	○		○				○	○			
*115. invite	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
116. join	○				○		○		○			○	○	○	○
117. jump	○	○		○	○		○		○	○		○			
*118. keep	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
119. kick					○		○		○						
120. kill	○		○		○		○		○			○	○		
121. kiss	○	○		○			○		○				○		
*122. knock	○	○	○	○	○		○		○			○	○	○	
*123. know	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
124. land	○	○	○		○		○			○		○			
125. last	○						○		○						
126. laugh		○	○	○			○		○		○	○	○	○	
127. lay		○			○		○		○			○	○		
128. lead	○				○		○		○			○	○		○
*129. learn	○	○	○	○	○		○		○		○	○	○	○	○
*130. leave	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
*131. lend	○	○	○	○	○		○					○	○	○	
*132. let	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○		○
*133. lie	○	○	○	○	○		○		○			○	○		
134. light	○		○	○			○		○		○			○	○
*135. like	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	○
*136. listen	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○	○	

調査対象 動 詞	S T					D C										
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR	
						a	b									
*137. live	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
138. lock			○	○	○	○	○		○	○		○				
*139. look	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*140. lose	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	
*141. love	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		
142. mail		○						○	○	○			○	○	○	
*143. make	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
144. mark		○						○	○				○			
145. marry		○	○	○		○	○			○		○	○			
146. mean	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
*147. meet	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
148. mind			○				○	○	○	○		○	○	○	○	
149. mix			○				○	○	○			○				
150. move	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	
151. name		○	○	○		○	○	○	○	○	○					
*152. need	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
153. nose					○											
*154. open	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		
155. operate				○					○	○						
156. overcome				○												
157. own		○		○		○	○	○		○	○	○	○			
*158. paint	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	
159. park			○				○	○	○			○		○		
160. pass	○						○	○	○	○		○	○	○	○	
161. pause	○						○	○		○						
162. pay		○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
163. pick	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	
164. plan		○			○		○	○	○	○		○	○	○	○	
165. plant	○						○	○	○		○					

動 詞 \ 調 査 対 象	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
*166. play	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
*167. please	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
168. point		○		○		○	○	○			○	○	○		
169. practice	○			○	○	○	○		○	○		○			○
170. praise	○					○	○					○			
171. prepare				○		○	○		○	○		○	○	○	○
172. present		○		○		○	○		○			○	○		
173. promise			○			○	○	○	○			○	○	○	○
174. pronounce					○		○		○						
175. pull	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	
176. pump	○				○		○				○				
177. push		○			○	○	○	○	○		○	○		○	
*178. put	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
179. rain	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
*180. reach	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		
*181. read	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
182. receive			○			○	○		○			○	○	○	
183. record					○		○								
184. remember	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
185. repeat					○	○	○		○	○		○			
186. respect	○			○		○	○		○			○			
187. rest			○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	
188. return	○			○	○	○	○	○	○			○	○	○	
*189. ride	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	
190. ring	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○
*191. rise	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○
192. rob					○		○					○			
193. row	○	○				○	○					○	○		
*194. run	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
195. sail		○	○		○	○	○	○			○	○	○		○
196. save	○		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	

動 詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
*197. say	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
198. scold			○			○	○					○			
*199. see	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
200. seed		○													
201. seem				○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*202. sell	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*203. send	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
204. serve	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		
205. set		○			○	○	○	○	○			○	○		○
206. share				○		○	○	○				○			
*207. shine	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		
208. shock			○			○	○					○			
209. shoot	○			○		○	○					○	○		
210. shop	○			○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
211. shout		○	○	○		○	○	○	○			○	○		
*212. show	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*213. shut	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○		
214. sign			○	○		○	○		○	○		○	○	○	
*215. sing	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		
*216. sit	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*217. skate	○	○	○	○	○				○			○		○	
*218. ski	○	○	○	○	○			○	○			○		○	
*219. sleep	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
220. smell	○			○		○	○	○	○		○	○	○		
*221. smile	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	
222. smoke			○			○	○	○		○	○	○	○	○	
223. snow	○				○		○		○			○	○		○
224. sound				○					○			○	○	○	
225. spear		○													
*226. speak	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
227. spell					○		○	○	○	○	○	○		○	
*228. spend	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*229. stand	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

動 詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
*230. start	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
*231. stay	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
232. steal			○			○	○		○			○	○		
233. step				○	○	○	○	○	○		○	○	○		○
*234. stop	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
235. strike					○	○	○		○			○	○	○	
*236. study	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
237. suppose		○				○	○	○	○	○		○	○		○
238. surprise	○	○	○		○	○	○	○	○			○	○		
*239. swim	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
240. swing		○				○	○	○							
*241. take	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*242. talk	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
243. tape					○										
244. taste				○		○	○	○	○		○	○		○	
*245. teach	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
246. telephone	○		○		○		○	○	○			○	○		○
*247. tell	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
248. test			○		○		○		○						
*249. thank	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
*250. think	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*251. throw	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		
252. touch	○	○		○		○	○	○	○		○	○	○		
253. train		○				○	○			○	○	○	○		
254. translate				○			○					○			
255. travel			○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○
*256. try	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*257. turn	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
*258. understand	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*259. use	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

調査対象 動詞	S T					D C									
	EE	NP	NH	TE	BS	LJE		SD	LWT	E9	ETP	TWE	LE	LIN	COR
						a	b								
*260. visit	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○
*261. wait	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
262. wake	○			○		○	○	○	○	○		○		○	
*263. walk	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
*264. want	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*265. wash	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*266. watch	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
267. water					○	○	○					○			
268. wear	○			○		○	○	○	○	○		○	○	○	○
269. welcome		○					○					○			
270. win		○	○			○	○	○	○			○	○		○
*271. wish	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
272. wonder	○		○			○	○		○	○		○	○	○	
*273. work	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○
274. worry	○			○			○		○	○		○	○	○	○
275. wreck		○				○	○	○							
*276. write	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

[注] 1. ST=中学校英語教科書

EE=Everyday English

NP=New Prince English Course

NH=New Horizon English Course

TE=Total English

BS=Blue Sky Books

DC=初級辞書および会話教本

LJE=Longmans' Junior English Dictionary, 1965.

(a)=1,500 very common words

(b)=5,500 main words

SD=Richard Scarry's Storybook Dictionary, 1967.

LWT=Life With the Taylors, 1966.

E9=English 900, 1964.

ETP=English Through Pictures, Book I 1960, Book II 1957.

TWE=Thousand-word English, 1972.

LE=Reader's Digest Living English Course, 1967.

LIN=Linguaphone American English Course, 1971.  
COR=Cortina Method American English, 1966.

2. interest be interested in は必修連語に指定されているが、interest は他動詞としての説明もない教科書もあるので、必修語からはずした。
3. \*印は必修語
4. ○印はその語が使用されていることを示す。
5. be, have は変化した形を除き、それぞれ一語と数えた。

表Ⅰは、「調査のねらい」で述べた、各教科書に使用されている動詞の種類を表にしたものである。

これで見ると、必修語については数個の例外を除いて、おおむね妥当な語が選ばれていると考えられる。

しかし、必修語以外の語については、教科書間でかなりのばらつきがみられ、また、STとDCの間にもいくつかの意外な結果がみられる。この相関関係をさらにくわしく検討したのが以下の(2)～(4)である。

## (2) 教科書間の比較

表Ⅱは必修語以外の動詞で1種類の教科書にしか使用されていないものを教科書別に示したものである。

表Ⅱの上段は、DCの使用率50%以下の動詞、下段は、DCの使用率60%以上の動詞を示している。

二つのグループに分類したのは、1種類の教科書にしか使用されていない場合でも、「身近かな」語であるかどうかの問題が残るからである。

たとえば、NPのacheは他の4種類の教科書にはなく、しかもDCの使用率20%以下の語である。他方、EEのpassは他の4種類の教科書にはないが、DCの使用率80%以上の語である。

[参考] 必修語に指定されていないが、すべての教科書に使用されている動詞は次の10語である。

bear, change, close, cover, die, enjoy, mean,  
move, pick, rain

表 II 一種類の教科書にしか使用されていない動詞

教科書 使用率	EE	NP	NH	TE	BS
DC の使用率 50%以下 の動詞	*fry hunt last pause plant praise	*ache breathe celebrate *circle control *decorate dig discuss *envy *guide injure mark *seed *spear swing *welcome wreck	attend *bloom bow color *impress mix park scold shock steal	bother continue *design develop escape fold *operate *overcome share sound translate	command head kick *nose *pronounce *record repeat *rob *take water
DC の使用率 60%以上 の動詞	fix <u>pass</u>	allow mail <u>suppose</u> train	blow choose <u>drop</u> <u>mind</u> <u>promise</u> receive smoke	<u>belong</u> follow <u>prepare</u> seem taste	add spell strike

- [注] 1. \*印はDCの使用率20%以下  
2. \_\_\_\_\_はDCの使用率80%以上

## (3) 必修語との関係

表Ⅲ DCの使用率60%以上で必修語でないもの

A	B	A	B	A	B
2. <u>add</u>	1	98. <u>happen</u>	1	195. <u>sail</u>	3
3. <u>agree</u>	2	103. <u>hide</u>	3	196. <u>save</u>	4
4. <u>allow</u>	1	104. <u>hit</u>	4	201. <u>seem</u>	1
9. <u>bake</u>	2	108. <u>hurry</u>	4	204. <u>serve</u>	4
11. <u>bear</u>	5	109. <u>hurt</u>	3	205. <u>set</u>	2
15. <u>believe</u>	4	116. <u>join</u>	1	210. <u>shop</u>	3
16. <u>belong</u>	1	117. <u>jump</u>	4	211. <u>shout</u>	3
17. <u>blow</u>	1	126. <u>laugh</u>	3	214. <u>sign</u>	2
26. <u>burn</u>	2	127. <u>lay</u>	2	220. <u>smell</u>	2
30. <u>care</u>	2	128. <u>lead</u>	2	222. <u>smoke</u>	1
34. <u>change</u>	5	146. <u>mean</u>	5	227. <u>spell</u>	1
36. <u>choose</u>	1	148. <u>mind</u>	1	233. <u>step</u>	2
40. <u>close</u>	5	150. <u>move</u>	5	235. <u>strike</u>	1
47. <u>cook</u>	4	151. <u>name</u>	3	237. <u>suppose</u>	1
48. <u>count</u>	3	157. <u>own</u>	2	238. <u>surprise</u>	4
49. <u>cover</u>	5	160. <u>pass</u>	1	244. <u>taste</u>	1
54. <u>decide</u>	2	162. <u>pay</u>	3	252. <u>touch</u>	3
58. <u>die</u>	5	163. <u>pick</u>	5	253. <u>train</u>	1
61. <u>discover</u>	3	164. <u>plan</u>	2	255. <u>travel</u>	3
65. <u>dress</u>	2	168. <u>point</u>	2	262. <u>wake</u>	2
68. <u>drop</u>	1	169. <u>practice</u>	3	268. <u>wear</u>	2
70. <u>end</u>	2	171. <u>prepare</u>	1	270. <u>win</u>	2
71. <u>enjoy</u>	5	173. <u>promise</u>	1	272. <u>wonder</u>	2
72. <u>enter</u>	2	175. <u>pull</u>	4	274. <u>worry</u>	2
75. <u>excuse</u>	3	177. <u>push</u>	2		
76. <u>explain</u>	2	182. <u>receive</u>	1		
79. <u>feel</u>	4	184. <u>remember</u>	4		
81. <u>fill</u>	2	187. <u>rest</u>	2		
85. <u>fix</u>	1	188. <u>return</u>	3		
88. <u>follow</u>	1	190. <u>ring</u>	3		

- [注] 1. Aは表Iで示した語と番号  
 2. Bは使用されている教科書の種類  
 3. \_\_\_\_\_はDCの使用率80%以上

表Ⅲは、必修語に指定されていないが、DCの使用率60%以上および80%以上の動詞をぬ

きだしたものである。

この表をみると、かなりの数の基本的な動詞が必修語になっていないことがわかる。つまり、必修語の動詞はきわめて制限されたものである。したがって、初級学習にはある程度の語数制限はやむをえないものの、学習をより釣合のとれたものにしていくために、これらの動詞をどうとり入れるかが一つの重要な課題である。

各教科書でこれらの語がどの程度とり入れられているかについては、次の表Ⅳに示すことにする。

〔参考〕 (f) 一方、必修語に指定されている動詞でDCの使用率 50%以下のものは次の5語である。

lend, lie, shut, skate, ski

これらの動詞をみると、lie や shut がDCであまり使用されていないのは意外である。

なお、現行の「指導書」では、示されている動詞が 20 語ふえているが、はたして skate や ski がそのなかに含まれる重要な語であるかどうかは疑問である。

(g) 「指導書」で新しく必修語として追加された動詞は次の 20 語である。

break, clean, climb, cook, dance, draw,  
drive, knock, lose, love, paint, skate, ski,  
spend, start, stay, throw, turn, wait, watch

#### (4) 総合比較

表Ⅳ 総合比較表

教科書		EE	NP	NH	TE	BS
a	使用されている動詞の数	172	181	173	184	171
b	必修語以外の動詞の数	64	73	65	76	63
c	一種類の教科書にしか使用されていない動詞の数	8	21	17	16	13
d	必修語をのぞいて、三種類以上の教科書に使用されている動詞の数	36	34	37	36	38
e	cで表1のDCの使用率 50%以下の語数	6	17	10	11	10
f	同上で使用率 60%以上の語数	2	4	7	5	3
g	表1のDCの使用率 60%以上で、必修語以外の語数	39	44	41	50	40
h	c/b%	12.5	28.8	26.2	21.1	20.6
i	e/b%	9.4	23.3	16.9	14.5	15.9
j	e/c%	75.0	81.0	58.8	68.8	76.9
k	f/b%	3.1	5.5	10.8	6.6	4.8
l	g/b%	60.9	60.3	61.5	65.8	63.5

〔注〕 1. aはBook I～Ⅲ  
2. 学習指導要領の610語のうち、beとhaveはそれぞれ一語にかぞえ、必修語の動詞の数を108とする。

表Ⅳは、(a)～(d)で各教科書に使用されている動詞の数について、(e)～(g)で各教科書とDCにおける動詞の使用率の比較について、(h)～(l)で上記(a)～(g)の相互の比率を示したものである。

この表からもわかるように次のことが明らかである。

(f) 各教科書に使用されている動詞の数はほぼ同じで、最高184、最少171である。しかし、必修語以外の動詞で、1種類の教科書にしか使用されていない動詞の数にはかなりの違いがある。

また、必修語以外の動詞で、3種類以上の教科書に使用されている動詞の数はほとんど変わらない。

(g) 上記(f)で述べたように、本表のc項ではばらつきがみられるが、これには二つの意味がふくまれている。つまり、DCにおける使用頻度の高い場合と低い場合とである。

たとえば、NHでは、c項の17語のうち、DCの使用率50%以下のものが10語、60%以上の語が7語であるに対して、NPでは、それぞれ17語と4語である。

(h) (h)～(l)は、上記(f)(g)の相互の関係をそれぞれパーセントで示したものである。

## Ⅳ ま と め

これらの調査の結果、新学習指導要領に準拠した中学校の新しい教科書に使用されている動詞の数は116語の必修語を除き、のべ160語で、必修語の約1.4倍である。

一方、この160語が頻度の高い平易な語であるかどうかを表Ⅲと比較してみたところ、このうち約半数の76語がDCの使用率50%以下の語であることがわかった。

したがって、「はじめに」で述べた教材の精選と「身近かな」英語という点からみて、中学教科書で使用される動詞の種類についてはかなり改善の余地があると思われる。また、各教科書で使用されている動詞にはかなりの違いがあるので、授業に際してはこまかい配慮が必要であろう。

なお、今回の調査にあたり、文部省は学習指導要領の必修語の指定の基準を明らかにしてもよいのではないかと思われた。また、教科書の巻末の単語表では、必修語の\*印のつけ方、単語および連語の意味の示し方(born, interestedなど)がまちまちであることに気付いた。さらに、巻末の単語表は既習学年のすべての単語を含めた総合的なものが望ましいと思った。

めづる故園の文壇は、嘗て世間が秋葉の原にチャリネーの曲馬を賞し、近頃は浅草で活動写真を喜ぶやうに彼を迎へた。」(冷笑)と書く。そして文壇に野心のある荷風はその波に乗って書きまくった。どちらもお坊っちゃんだが、荷風の方が年長であるだけ冷静に有利なように対処している。

日本が気に入らなかつたのも同様である。その怒りを光太郎はデカダンに爆発させ、「恨付の国」を書き、荷風は文明批評の「新婦朝者の日記」「冷笑」などに結晶させた。

年が経つにつれて、それぞれ独自の芸術境を拓いていったが、欧米で身につけてきた個の尊重、自由の尊重から、文壇・芸術界から離れる傾向を見せた。その離れ方は個性に応じて違ふのは論をまたない。光太郎の離群性、荷風の選抜性。

「生来の離群性はなほりさうにもないが」(山林)と書く光太郎、自分好みの人としか交らなかつた荷風。ともに個を買いたのである。私生活においても。兩人を尊敬する人は沢山居たが、兩人とも弟子として扱うことはなかつた。人間対人間、対等の扱いを買いた光太郎には「高村先生」と呼ぶことが出来なかつたようだ。慶応義塾の先生であつた荷風は「永井先生」時代があるけれど。

つけ焼刃ではない個の尊重が「孤高」の生活を余儀なくしたともいえようか。ノートその六の「独居について」「在野精神について」にすでにふれたことについては省察する。

「フランスへ行つて羨ましいのは全体の空気が凡て芸術を發達せしめるやうになつてゐることである。八百屋の下女とか洗濯屋の女房とか云ふ輩でも、サロン批評位は朝飯前にやつて退ける。……凡ての社会上の設備が芸術に親しむやうになつてゐる。日本などとは大変な相違である。……フランス人は一面甚だシニクである。凡てこの國の民性や状態は、あらゆる世界の國民が将来に於いて竟に行かざる可らざる方向を、暗示してゐるかの如き観がある。フランス人は、IL NYAQUIN PARIS (パリ程好い如はない)と自慢してゐる。何と自慢されても我々には返す言葉もない。」(フランスから帰つて)と光太郎は書くが、人間の究極の文化の姿をフランスに認めている。

荷風はフランス一辺倒、光太郎にはイギリスの影響が見えるのはやはり、一年ほどの滞在がものを云つてゐる。アングロサクソンの持つべきものを

身につけてゐる。倫理的人間であつたことの一翼を荷うといつてもよいかもしれない。荷風は獨逸ロンドンに立寄つただけ、フランスとの比較において、こびどくやつつけてゐる。米英仏と米仏との差はやはり争われない。しかしフランス文化がすぐれてゐると認めるのは兩人共通である。光太郎はホイットマン、ポー、さらにはトルストイ、ドストエフスキーなど米露の作家のものに関心があり、特にホイットマンには傾倒したが、荷風はドイツは嫌いであり、ロシア文学についても「ロシアのものなぞも……田舎臭いやうに思はれて」と。「私はフランス文学が最も自己の性情に適して居ると思つたであり、ひたすらフランス文学を愛した。光太郎が後にロマン・ロランに傾倒したが、フランスへの傾斜の影響なしとはいえないと思う。

すぐれた翻訳の仕事をしたことも共通である。詩では荷風の名訳詩集「珊瑚集」、光太郎のヴェルハレーンの「天上の炎」「明るい時」「午後の時」「夕の時」。光太郎にはさらに、ロマンロランの「ジャン クリストフ」「リユリ」、ロダン関係では「ロダンの言葉」「腕ロダンの言葉」、ホイットマンの「自選日記」など。すぐれた語学力が物をいっている。

兩人の道はそれぞれであつたが、そこに通う小径がいくつあつた。それは、ほぼ同時代にほぼ同じコースで外遊した結果のもたらしたものであるといつても過言ではないと思う。真に芸術に生きたこと、批評精神が旺盛であつたこと、個を買いたこと、自由を愛し、在野精神を發揮し、独居したことなどなど。すぐれた資質がすぐれた文化の真髓を身につけ、それぞれの華を咲かせ、実を結んだのである。

慶応義塾大学教授を辞職、「三田文学」の編集も辞した。三月末、断腸亭新築完成。誰にも遠慮気兼ねなく仕事に専念した。四月には趣味文芸雑誌「文明」を発刊、これは戯作者的態度で執筆、編集している。名作「腕くらべ」を八月から翌年十月まで文明に連載。大正七年には父遺産の邸宅を売却し、築地二丁目に移居した。「おかめ笹」を中央公論に発表。五月には雑誌「花月」を刊行している。大正九年、麻布市兵衛町に偏奇館を新築。創作と女出入りと、一見放蕩無頼の文人戯作者として戦時下に至るのである。

創作と放蕩とは不即不離、放蕩で得た糧が創作として実るのである。花柳界、さらには私娼、女給の生活が題材となれば、自然そこに荒唐、魔嬪の美が描かれることになる。陋巷や魔嬪や路地が舞台となる。反逆精神であり、批評精神であるものがいきいきと動く。自然の感受性は豊かで文学を彩った。名作「腕くらべ」は芸妓の世界、「つゆのあとさき」は女給の風俗、「湯東綺譚」「ひかげの花」は私娼の生活が描かれている。

「そも／＼私が初めてフランス語を学ぼうと云ふ心掛を起しましたのは、あゝモーパッサン先生よ。先生の文章を英語によらず、原文のままによみ味いたいと思つたからであります。」(モーパッサンの石像を拜す)というわけであるが、終生モーパッサンの影響を受けている。ゾラは外遊前、明治三十三年、木曜会の黒田湖山からゾラをはじめ西欧文学について教えられ、又福地桜痴の弟子榎本破笠からも教えられ、三十五年には「ゾラ氏の故郷」「ゾラ氏の『傑作』を読む」「ゾラ氏の作 La Bête Humaine」とゾラの紹介者となり、ゾライズムの小説を作った。三十六年にはゾライズムから離れようとする作風を示しかけていたが、渡米後、ゾラよりもモーパッサンに親しみを感じ、モーパッサンに移行している。そしてフロベール。この自然主義作家の三大巨匠の影響と、ロティ、ヴェルレーヌ、ゴッティエ、レニエ、ボードレール、ミュッセ、ランボオ、ゴンクール、ジイド等のもつものを吸収し、フランス文学のもつ華の趣を吸収し、ロマンティックな流れの作品を書いたのである。もちろん、為永春水等の人情本系統の作風も閑却できない。戯作者的態度に文人趣味を加え、その和洋の学識を駆使し、詩人としての情感、抒情を豊かに匂ひ出させ、柔軟に、鋭利に、人間を観察し、分析し、荷風の筆は運ばれている。「私は索居独棲の詩味を十九世紀西洋文学或は江戸時代の詩人より味い来つたと思はれる。」(西瓜)とある。とにかくフランス文学の影響を考えないで荷風の文学は論じられない。明確に打出されているの

を挙げてみると、ボードレールの「暗黒」は「支那街の記」「夜あるき」のテーマに、ヴェルレーヌの「秋の歌」は「落葉」の詩境に、Il pleure dans mon Coeurは「秋のちまた」のモチーフに、「雲翳」はレニエを引き合いに出し、「ヴェニス物語」は「牡丹の客」「昼すぎ」に、「朱塗のインク壺」は「鐘の声」に響き合うものがある。近代フランス文明・文学の唯美的な面に荷風は全面的に共鳴している。「わたくしはつらつら過去の生涯を回顧して見ると、この六十年の間、わたくしの思想と生活との方向を指導し来つたものは、支那人と西洋人の思想であった。支那の思想は老荘と仏教とを混和した宋以後のものである。西洋の思想は十九世紀のロマンチズムと其以後の個人主義的芸術至上主義である。わたくしの一生は獨特固有の跡を印するに足るべきものは何一つありはしなかつた。」(西瓜)と回想する。「三田文学」を主宰したあたりまでは文壇的に進出しようとし、進出したが、その後は興がのれば書くという自由な立場で終始し、文壇的には孤立していた。勿論、谷崎潤一郎はじめ久保田万太郎などの追隨はあつたけれど。

以上兩人の帰朝後から戦前までの文学活動などのアウトラインを述べたが、欧米、特にフランスの影響の深大さが明白に浮ぶ。近代の本質的なものを外遊で身につけたことについてはノートその六にまとめた。それを基準に日本を批評し、こびりこびりやっつけたことは共通である。ただ、光太郎にあっては日本人としての自覚の上であつたし、荷風は西洋崇拜から目覚めた日本伝統への復帰であつたことの本質的な相違は忘れてはならない。だから光太郎は戦争詩に突入したし、荷風は終始一貫、批判的態度をとつたのである。文学、人生への傾けは具体的にはアウトラインに書いた。フランスやフランス人を愛したことも共通で、光太郎は「雨にうたるゝカテドラル・感謝・聖ジヤヌス・車中のロダン・レオン・ドウベル」、戦争詩にあつても「無血開城わが愛するフランスの為に」を書き、荷風に至っては遺産はフランスに贈与したいといひ、戦中はフランスの勝利を折り、パリ陥落を悲しみ作品発表中止といった手放しの有様。断腸亭日乗にフランスの事は枚挙のいとまなく書かれている。

兩人ともに帰朝時は「洋行帰り」として、世間からちやほやされた事も同じである。光太郎は彫刻家として、美術評論家として、詩人として迎え入れられた。自身が波に乗らず、デカダンを極めたのであつた。荷風は「新奇を

フランスへ渡つては特に歴史臭さ、即ち伝統尊重の姿を目のあたり見た。皮相の物質文明だけがすべてでないこと、本質的なものを感得してきたのである。その伝統尊重を日本では荷風は自分好みの為永春木の江戸に遷ることしかなかったのであり、蕩児の「色」の中心をなした花柳界に傾斜せざるを得なかった結果である。

郷土再発見であり、過去への郷愁を歌う「すみだ川」も、安っぽく進化の名のもとに開発変貌してゆく東京の浮薄さに目をそむけた江戸への追憶である。

「冷笑」はもちろん文明批評。「乱雑没趣味なる明治四二年の東京生活の外形に向つて沈重なる批評を試み、其の時代の空気の中に安住する事の困難なるを嘆息し、併せてわが純良なる日本の特色の那辺にあるかを考究せんとしたものである。」「冷笑は享楽主義の主人公が風土の空気に余儀なくせられて川柳風のおきらめと生悟りに入らうとする苦悶と悲哀とを語らうとしたものである。」（紅茶の後）といっているのはそれは証明される。五人の人物、小山清、吉野紅雨、中谷丁蔵、徳井勝之助、桑島青草はすべて荷風の分身である。皮相の西欧模倣をもって近代化であると誤っている世相、その道徳、思想、世態風俗の批評であることは、荷風が真の西欧文明に触れてきた証拠でもあり、又、自信をもって書きうるわけでもある。個人主義、自由主義の立場から封建的な道徳・思想への懐疑、非難となり、皮相の模倣で世態風俗が伝統を失うことへの嫌悪をあらはにしている。その伝統とは前記のように江戸であり、花柳界であり、文人であった。江戸、花柳界、文人への傾斜は外遊前からあったのであるが、思想的根拠を荷風は外遊で得たのである。

荷風が明治三十七年四月廿六日にタコマから生田癸山に出した手紙には「僕も今度の旅で今まで覚えた事の無い孤独寂寞悲哀の感を経験したし又異郷の風景の美しいに出遇つては境遇が孤独であるだけ其れだけ『自然の愛』を感じる事が出来た。……亜米利加も今の処では別に此れと云ふ影響を与へない。僕は一面非常に西洋崇拜のハイカラだけれども一面は又頗る保守的な処があるのだよ。此の保守的と云ふのは即江戸式天明振りの若旦那思想と云ふのかも知れないさ。僕は洋服のハイカラ姿を好むと同時に前掛に煙草入雪駄チャラ〜と云ふ姿を忘れる事が出来ないのさ。……能ふべくんば将来に劇作家で俳優等と一緒に愉快な生活を送りたいと空想する事も厭である。」

とある。これは憧れのフランス生活を経験した後も一生続いた。ただ江戸への傾斜に伝統尊重という大義名分が、単なる趣味でないものが付加されたのである。因みに劇作家で云々の条は、左田次とは親しい付合があつたし、彼のために脚本を書いたこともある。猿之助、吉右衛門、菊五郎なども付合つたし、後年浅草出遊が多くなつては昭和十三年「葛飾情話」を浅草公園オペラ館に於て上演以来、戦争奇烈の時は除き、戦後も浅草六区の常盤座、大塚劇場、ロック座などの楽屋に入り浸り、御氣に入りの女優のために脚本も書き、時には通行人程度で舞台に出て好評を博したこともあり、荷風の青年時代の想が実現している。

四十三年二月、森岡外、上田敏丙氏が慶応義塾大学文学科劇新に参予、両氏の推挽で同大学文学科教授となり、文学科の事務も扱、「三田文学」編集主幹を兼ね、月俸と手当とで百五十拾円と大学教授中の最高給を得るようになった。大正五年三月病氣を理由に辞職するまで、永井教授は遅刻することもない真面目なよい教授であつた。五月には「三田文学」が創刊され所謂「三田派」の誕生となるのである。他の雑誌新聞への寄稿は殆どせず「三田文学」を作品の発表誌とした。これは退職の年まで続いたが、こんな義理がたい面もあった。「小生僕三田文学より月々若干千頂敬致居候お蔭を以て日頃読度しと思ふ書籍も心安く購ひて読み見たき芝居も替目毎に見物でき候事此れ皆三田文学ある故にて常に非才の身に取れ無上の高恩を感じる事挙げて致ふ可からず。されば敢て忠臣二君に見えずと申程の事には無御座候得共幾分にても他の雑誌新聞に力を分ち候儀は何分心苦しき儀に御座候。」（大窪だより）とある。この十一月二十日、パンの会に初めて出席。

四十四年四月帝室博物館にて浮世絵を鑑賞、これが後に大がかりになり浮世絵研究となつた。在米中諸市の美術館で浮世絵をみて感動していたのだが、この度の鑑賞で表流に出たので、江戸の浮世絵の価値を認識させるパイロット的役割を果たしたのである。

大正元年結婚。二年文没。離婚。文芸座談会火曜会を自邸で開催。

大正四年、中央公論社長の麻田氏に「教師と作家とは到底両立せざるものにて土日と一日二日位のみまは有之とも精神状態が創作家にならざる為め遂に思はしきもの出来ずその為め此頃は懊惱まかりある次第に候。」と手紙している。

大正五年二月「三田文学」から離れて独自の文芸雑誌発刊を決心し、三月

それはフランスから得たものの象徴であり、それは帰国直後のコンプレックスの表現とは違ふ、本質的なものを示している。十五年たつても二十年たつても本質的には日本の文化は伸びなかつたからこそ、感動がまざまざとよみがえりうるのである。「珈琲店より」の「ああ、僕はやっぱり日本人だ。」の自覚は明らかにコンプレックスだが、「赤いベデカを手持った顔の黄いろい旅人」(ゴネチヤの旅人)の表現となり、戦時中は裏返しの誇示となり「天日の下に黄をさらさう」となるのであつた。

荷風の帰朝は父の期待を裏切り、現預録者に対しても面目のたつものではなく、荷風は部屋住も居づらく、自活の道を見出そうと、上田敏氏に第三高等学校フランス語教師の職を依頼している。「あめりか物語」が好評で、自倍を得、フランス見聞記の執筆や編集に過し、四十二年は本格的に創作に活躍した。帰朝の年には、八月三十日、九月十三日・二十日と三回「欧米に於ける音楽会及びオペラ劇場」を読売新聞に、九月「ひとり旅」(中学世界)十月「ADIEU」(新潮)、「西洋音楽最近の傾向」(早稲田文学)、十一月「蛇つかひ」(早稲田文学)、「黄昏の地中海」と「娼婦雜感」(新潮)、「雅号について」(中学世界)、十二月「成功の恨み」(新小説)、「紅燈集」(趣味)、「日本人の作は素人臭い」(文章世界) 二十一・二十二日の二回「仏蘭西観劇談」を国民新聞にという状況。四十二年は一月「狐」(中学世界)、「祭の夜がたり」と「欧米の生活と日本の生活」(新潮)、「カルチエー、ラタンの一役」(太陽)、「思惑」(秀才文壇)、「晩餐の後」(趣味)、「除夜」(笑)、「セウパッサンの旅日記」(早稲田文学)、二月「深川の唄」(趣味)、「仏蘭西現代の小説家」(秀才文壇)、三月「壘天」(帝國文学)、「監獄署の裏」(早稲田文学)、「仏国に於ける印象派」(文章世界)、四月「ふらんす物語」刊行、発売禁止処分を受け、ヴェルレーヌ、ボードレール、レニエなどの訳詩を女子文壇、新文林、スバルに発表、四月「仏国文壇の象徴派について」(新文林)、同月十一日「フランス物語の発売禁止」を読売新聞に、五月「祝盃」(中央公論)、「春のおとづれ」(新潮)、「芸術品と芸術家の任務」(芸術は知識の樹に咲く花也)、「文章世界」、「東洋的風土の特色」(中学世界)、六月「最初の接吻」(女子文壇)、「音楽雑談」(早稲田文学)、七月「放棄」(新小説)、「牡丹の客」(中央公論)、「作品の性質に依り何れにても可也」(新潮)、「二人処女」(趣味)、「現実で満足だ」(文章世界)、八月「花より雨に」(秀才文壇)、「

「浅草趣味」(趣味)、九月「泉のほとり」(趣味)、「帰外先生」(中央公論)、「批評について」(文章読本)、十月「荷風集」(易風社刊行)、「娼朝者の日記」(中央公論)、十一月「小説壇の現在及び仏蘭小説の近事」(新潮)、「雑誌よりは馬琴三馬」(文章世界)、十二月「すみだ川」(新小説)、「冷笑」を同月十三日から翌年二月二十八日まで、東京朝日新聞に連載、「小説と口絵」(時事新報)という活躍ぶり。新娼朝者という好条件を見逃すはずのない雑誌新聞、そして荷風自身の野心が相まって作品の数は多い。その中で注目すべきは「深川の唄」「娼朝者の日記」「冷笑」である。「深川の唄」は皮相的に西洋化した東京の世態風俗を冷笑し、深川に残る風物と、江戸追慕の情を詠嘆的に幽婉にうたい、「娼朝者の日記」は「自分の西洋崇拜は眼に見える市街繁華とか工場の壮大とか凡て物質文明の状態からではない。個人の胸底に流れて居る根本の思想に對してである」「僕の見た処西洋の社会と云ふ者は何処から何処まで悉く近代的ではない。近代的がどんな事をも冒す事の出来ない部分が如何なるものにもチャンと残つて居る。」「西洋と云ふ奴は非常に昔臭い奴だ。歴史臭い奴だ。」と書き、欧文化の伝統性と連続性とを近代文明の外観だけに眩惑されずに見ている。明治の文明開化は鹿鳴館時代に示されるような皮相的なものから始まり興福寺の五重塔が十五円で売りに出され、仏像が縁の下に肥料としてつっこまれるという自国の文化、伝統を見失つた馬鹿げた面を持つていた。それは一時歯止めがされたものの、欧文化の吸収は専ら皮相的外面的につづけられた。荷風は体験を通して、東郷されることのない自由な外遊でもって、欧文化が本質的に持つものを身につけてきた。それを基盤にすれば、云うべきことが山のように眼にうつる。そして文明批評をしているのである。主人公は西洋文明を讚美し、その旧友流水は、明治の社会を罵り、江戸文化を懐しむ。も一人の新娼朝者の友人もまた主人公同様で、みな荷風の文明批評なのである。そして「一時欧文化主義の盛んな時代に花柳界がなかつたなら、江戸の音楽演劇は全く絶滅してしまつたであらう。此の点に於て吾々は永久彼等に向つて感謝の意を表しなければならぬ。」と花柳界文化主義が述べられている。

荷風は外国生活を自由に、個人主義人生観を深く理解し身につけ、孤独生活を受するまでになつてゐた。日本と欧米の差を身をもって体験し、「九月十六日……仏蘭西の土も踏み得ずして空しく東洋の野蠻國に送り帰さるゝ此の身は長く生きたりとも何の楽しみかあらん。」とまで書く。父の配慮で

吐き出されている。この放埒と浪漫的抒情と焦躁の境地は「泥七宝」の小曲を境として転機が訪れた。智恵子を知ってデカダンの雰囲気から離脱でき、内的世界に美の探求の道が啓け、精選したからである。「爆発は爆発だ。爆発してしまふと、あとはもつと真摯な問題が目をさます。私をその情緒から救つて、私の本然に立返らせたのは智恵子との恋愛であつた。私が私になつたのは其からの事である。」(パンの会の頃)と、自己の真実を徹し、自己の充実と完成とを目ざしたヒューマニスト、美の追求者光太郎の新生の出発となつた。このあたりで書かれた「人類の泉」「群衆に」などに一人・孤・孤独のことが見え、ヨーロッパ的個が孤に移行している。

暗愚小伝の「美に生きる」生活がくりひろげられ「検討するもの内部生命／著積するもの内部財宝」と智恵子夫人と二人で内部世界を築いていった。智恵子が発病するまでの二十年程は、彫刻に時に翻訳に充実した仕事をした。まず、詩集「道程」後半の「道程」「秋の折り」「冬が来た」「牛」「婚姻の栄華」のように知性的な健康な男性的な湧き上る感動が意欲的に書かれた。大正十年の「雨にうたるるカテドラル」、十一年の「落葉を浴びて立つ」、十二年の「樹下の二人」「鉄を愛す」など名作が次々と書かれた。統いて狂歌時代。

ロマン ロランの影響を受け、社会的真実追究が自己の内的世界充実に加つたのである。ロランの文学紹介の仕事は明治四十五年「クロオド デュビツシイの歌劇」の翻訳をはじめに、大正二年「ジャン クリストフ」の部分訳、十一・二年「リリユリ」を訳し、「リリユリ」の詩作、「ロマン ロラン六十回の誕辰に」の文、「平和の祭壇」の訳詩などがある。ヨーロッパの良心、さらには世界の良心とならうとしていたロマン ロランへの傾倒は「ロマン ロラン友の会」となり、小山内薫、吉江番松、武者小路実篤、野口米次郎、倉田百三などと共に発起人になっている。ロマン ロランの芸術の受容により、より深い人間性省察と高い理想主義とを、「生」の「文学」の目標にした。狂歌篇の「滑稽」「傷をなめる獅子」「戯」「雷歌」「ぼろぼろな駝鳥」など強烈な詩精神と意欲のみなざる激しさがある。反俗、むしろ超俗的精神主義の、卑俗なものへの怒り、否定、抵抗が象徴されている。光太郎はヴェルヘーランの「三部作」の訳や「天上の夜」の訳もしているし、ホイットマンの「自述日記」を訳し、「ホイットマンの事」を書いているが、この二人とロマン ロランの作品が、ヒューマニスト光太郎の内的精神世界

に否定の精神、批判の精神を一層育成したのである。支配権力への憎悪、否定の情が最も強烈なのは前記の中でも「ぼろぼろな駝鳥」である。狂歌篇時代には「惹」「火星が出てゐる」「或る墓碑銘」「同棲同類」「熟知」「首の座」「刃物を研ぐ人」「のつばの奴は黙つてゐる」「似顔」など注目すべき作品が多い。「似顔」「もう一つの自転するもの」など、「このグロテスクな顔面に刻まれた日本帝国資本主義発展の全実歴を記録する」「世界の鉄と火薬とそうしるの巨大なものが/もう一度やみ難い方向に向いてゆくのを/すこし油のにじんだ活字が教へる」と社会的性格を帯びた詩も作られた。そして既述通りの戦争詩に入つてゆく。

智恵子抄の作品は道程後期から戦中にかけて、さらには戦後に及んで作られている。外遊がどんな形で詩の仕事に反映しているか、まずパンの会でも異質であり、単に趣味的なものではなく、生の意識と抵抗感との爆発であり、パリで詩の開眼をされ、帰朝してからあふれるような勢で作つたことがあげられる。四十三年は九篇、四十四年は三十七篇、四十五年は二十五篇である。

最初に発表された作品はタイトルが仏語でLES IMPRESSIONS DONZAS、の九篇、作中にもフランス語が使つてある。微妙なニュアンスや発想を日本語では表現できなかったからか、洋行帰りの暗示か、或はそのどちらもか。所謂「生」の影響が見える。注目すべき発想は落着感から来る日本劣等感、自己嫌悪、そのために生ずる日本的なものへの、旧体制への否定と反逆である。これは「根付の因」に示されていることは既にふれた。「東京市は、今、「カルヴェル」の凱旋門に濁つてゐる。……東京の市街を歩いて悲しい悔殺を思はずには居られなかつた。」(盆の有する滑稽性)と、東京とパリを比較して情無い思ひになっているが、この思ひの爆発が「根付の因」で、自嘲もあるが、日本人に八つ当たりしているのである。「よろこびを告ぐ」のリーチに対する過剰な礼賛。英国生活における知己であり、心の支えでもあつたらうから、その敬愛の情は当然であろうが、やはりコンプレックスと日本的なるものへの軽視が感ぜられる。「雨にうたるるカテドラル」の「毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。/あの日本人です。」は大正十年に、「感謝」は大正十五年に、在仏時の感動、感闘が詩に結実したのであるが、フランスの光太郎への深い影響が刻まれている。日本にないもの、質量ともに圧倒する大寺院、洗練の極みのわけのわかる心、

(山居七年)と後年語った通りなのである。

帰国後、網像会社も美校教授も辞り、「二代目光雲になれ、派閥的勢力拡大に尽せ」との光雲の弟子連の要請も勿論御免を蒙り、翌年弟道利と「環玕洞」西邸を神田淡路町に開いたり、北海道移住を計画、月來に行くと同時に舞もどったり、環玕洞も人に譲り、大正元年にはフェウザン会をつくるなど、生きる道を求めて苦悩した。お坊ちゃん気まぐれでは決してなかった。

「パリの社会になれた生活を目安にして、あらゆる方面の旧体制に構ついてもりである。親類縁者や他人からは札つきの不良のやうに目されながら、自分では無上の良心を研いでゐたつもりである。良心に従へば従ふほど、世界のおきてと逆になり、ひろく要領のよい生活法などは出来なくなつた。結局父の罪を裔りながらあばれてゐたといふことになる。」(父との関係)と、旧態依然の周囲に対して、自分なりに真実を求めて良心的になればなるほど、事志と異り、発酵し、膨脹するエネルギーをもて余し、デカダンへと傾斜していったのである。「パンの会」の狂瀾怒濤に巻きこまれ、表面現象としては、放埒に自己解放していたのである。

#### “PERMETTEZ MOI DE VOUS PRÉSENTER”

「PRESENTATION」は即興的變奏の歌で、パンの会を促させるものが前半にある。パンの会の談笑、静態、熱気、情景がそのまま歌いこまれている。「パンの提灯が酒壺から吹く風に搖れて、／ゆらりと動き、はらりと動く。／ベルガモオの匂と、巴且杏の匂ひと、／ヘリオトロオフと、ポムベイア。／味噌歯の燈妓が四人、／足を揃へて、声を揃へて、／えい、えい、えい、えい、えい、えい、／と踊れば、／久菊も、五郎丸も、凡骨も、狼之助も、／真赤になつて酔うたり。／飲菜の鬼や、刺青や、河内屋兵衛や、／百円の無尻や、／生の種や、／郷土色彩や、坐せる女や、／綴れの綿か、ゴフランの襦袢か、／織られたり、とんからりと。／頭に葡萄を戴せたパンの歯面が、／火の様な手を出して、／大きな杯を渡した時。／横から焼酎に火を点けて、／“PERMETTEZ MOI DE VOUS PRÉSENTER...”と光太郎も酔いながら即興的に書いたのである。「私は昼間つから、酒に酔ひ揺れては、ポオドレエルの『アシッシュ』の詩」などを翻訳口述して、マドモワゼル、ウメに書き取らせ、「スバル」なんかに出した。」(ヒウザン会とパンの会)の体たらく、「外国から帰つて来てはじめて日本の情炎に染れ、

当時新しい文芸家の間にまき起つた所謂疾風怒濤時代に身をもまれ、あらゆるものに対する現状憎悪から来るデカダン性と、そのデカダン性に対する懷疑と、斯かる泥沼から脱却しようとする焦燥でめちやめちやになつてゐた私自身を此処に見る」(某月某日)と単なるデカダンでなかつたこともわかる。「パンの会の頃」に「銘々が自己の内から迸る強烈な光で互は照し合つてゐたのだ。いつ思ひ出しても滑稽なほど無邪気な燃えさかる性善物語ばかりだ。あの頃、万事遅時な私は外国から帰つて来てはじめて本當の青春の無鉄砲が内に目ざめた。其が時代的に或る契合点を持つてゐた。」と語つてゐる。ローッパ風の近代情操を身につけた新鮮な芸術家として文壇に迎えられ、光太郎も熱して詩作をつづけ、その詩は浪漫主義の「明星」、芸術至上主義の「スバル」、江戸情調的異国情調的、顔店耽美情調の「屋上庭園」と、これらと対蹠的な理想主義の「白樺」、以上の文芸雑誌上に発表した。詩集「道程」の前半三十二篇は、この時代の作品である。官能の熱気、生の意識、その敗亡、生命の過剩、自意識の過剩、頹廢、放埒、その心痛、危機感、抵抗感に満ちた抒情詩ばかりである。

暗愚小伝ではこの時代を回顧して「デカダン」がある。「まつたく行くべきところが無い。／デカダンと人は言つて興がるが／こんな痛い良心の眼ざめを會て知らない。／遅まきの青春がやつてきて／私はますます深みに落ちる。／意識しながらすり落ちる。」と、パンの会で騒いでいても、北原白秋や、木下左太郎などとのデカダンとは質的に違つていたわけである。火のついた生の意識と叛逆との放埒であり、自己解放なのであつた。白秋の「江戸情調的異国情調的憧憬」という趣味的なものとは質を異にしてゐる。行くべき処のない焦燥、すり落ちることを意識する危機感、その表れた姿は「酔つてゐる」放埒なのである。モナ・リザ一連の詩の生活がそれである。「新緑の毒著」の生命力の過剩、情緒の頹廢、不安定の心理、焦燥、そして寂寥。「寂寥」という時、行くべきところがない焦燥は「何処にか走らざるべからず／走るべき処なし／何事か為さざるべからず／為すべき事なし／坐するに堪えず／脅迫は大地に満ちてり……ああ、走るべき道を教へよ／為すべき事を知らしめよ／氷河の底は火の如く痛し／痛し、痛し」と痛烈を極めてゐる。自国で彫刻を本格的に勉強しようと思つて帰朝したのに、すぐ実用に供しようとする周囲への不満、叛逆としての放埒、そこも安住の場所ではない、居ても立っても居られない、眞の生き方をする者の息のつかない焦燥が激しく

知れないが、その後、私自身の考え方も幾度変遷して、日本文化はすばらしいと思うようになり、……根本において、日本はまだ後進国なのではないかという疑問は抜けていない。ことにパリの壮麗と優雅をまのあたりに見ると、地下の萩原朝太郎にむかって『先生だって、一度パリへいらしたら、日本は世界の田舎者だとおっしゃったでしように』と、三十年前の論争を再開したい気持ちである。』とある。昭和四十五年ですらこんな記事が書かれるのである。明治にパリに行った光太郎や荷風が文明の「落差」を痛烈に感じたのは当然である。

光太郎は草野心平や又、高田厚厚と一緒にフランスへ行こうと思ったこともあり、「フランスはいいところだから一度は行っていらっしやい。」「……」「皿洗いもしました。おかげ様でどういふこともやれるし、何でもわかった。」「二十年七月、宮沢清六談」とあり、「遊ぶのはパリがいいけれど、住むのならイギリスだ。』ともいい、大正六年にアメリカでの彫刻個展を計画し、資金獲得に彫刻頒布会を発表したが、入会者が少く流れたこともあり、曾遊の地はいいものと見える。が、フランスにひかれていた比重が大きい。荷風は「余本年再び巴里に遊びたき考なれど、終生かの地に居住するわけにも行かず。帰りに後の寂寞不平を思ふ時は寧ろこのまゝ陋屋に老い朽つるに若かざるべし。感慨万種。遂に決意すること能はず。』（大正十一年二月三日）と。この日郵船出張所で渡航費をたずねている。

再び訪れた心を持たせる魅力のあるパリ。兩人とも御多分に洩れない。私の外祖父は慶応三年に松江藩からパリに、明治九年再び住友から留学させられ、「フランスはいい所だよ。」といったことを思い出す。又、「言葉を感じるのには芝居見物に限る。』と。

光太郎も荷風も観劇と音楽をきくのに忙しかつたようである。どちらも音楽好きで、素朴な鑑賞者理解者であった。光太郎は「回数切符を買って置いては、毎晩音楽会へ行つた巴里の冬の寒い夜更の事を思ひ出す。』（詩歌と音楽明治四十二年）と「私は音楽を熱愛する。東京で今のやうに音楽の自由にかかれなかつた二十年も前の頃、毎晩一度は『音』を探しに東京中をさまよひ歩いた事を思ひ出す。』（詩人の知つた事ではない昭和八年）などを見ると、専門外の音楽についてさえ落差が語られており、荷風の「新編朝日日記」にも日本の音楽の後進性が明記されている。主人公はピアノを演奏する音楽会、自宅での演奏、教授就任依頼の交渉などを通して荷風は音楽観を語

る。荷風は在米、在仏を通して音楽をきくのは熱心で、なかなかの音楽通であったから、主人公を音楽家にしたのである。

特にパリで開眼し、大人になつた光太郎にとって、故國のけちくささは我慢がならなかつたであろう。かぶれ、礼賛するという浅薄さではなく、近代文明の本質にふれ、自我に目覚め、個の尊厳を知り、自己を見つめ、インテリナショナルなパリにあつて困窮を忘れながら、やはり黄色人種であることを見つめ、自覚させられた光太郎にとって故國の現実があきたりなかつたのである。帰朝第一印象は「狭く、暗い、神戸に神戸が見えた。／フジャマは美しく、／うるさい田舎のやうだつた。／私はパリではじめて彫刻を悟り、／詩の真実に開眼され、／そここの庶民の一人一人に／文化のいはれをみてとつた。／悲しい思で是非もなく、／比べやうもない落差を感じた。／日本の事物園柄の一切を／なつかしみながら否定した。』（パリ）は帰國していいよ明確になつたのである。「故郷へ帰つた時の寂しさをも窮に心配」した通りであつた。「ああ僕はやつぱり日本人だ……」のどうにもならない自己嫌悪、けちくさい日本風土の否定、それを諷する所なく思ひ切つて爆発、発散させた「根付の困」。日本人の外貌・性向の嘲罵。日本人の持つ真実を残酷に辛辣に吐き出したのである。西欧で彫の深い端正な顔立の人々、モデル女まで個の自覚と自由の尊重の意識の見える、そんな人々を見なれた彫刻家光太郎の日に、自分も日本人であることを瞬間忘れた真実直視、——しかも情無い面ばかり——と、西欧における有色人種コンプレックスの潜在意識とが、「猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だばはげの様な、麦魚の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかげらの様な日本人」と書かせるのであつた。模倣、狡辯、奇怪、食えない、自主性なき集団性、こけおとし、役に立たない、——などという直喩として吐きすてるのである。「ふるさとの少女を見ればふるさとを佳しとしがたしかなしきかなや、醜さを親の親より誇ひねぎて今日にかもなるさては醜き・色みては盲目音にはみみしひのふるさとびとの顔のさびしさ」と歌にもずばりと詠む。「庭の小鳥」の「流鶯なああの声きけば／日本の鳥ではないさうな」にも日本風土の否定が感ぜられる。「……ロダンを学びたいということでした。……フランスではいいことも覚えてきたが、悪い洗礼も受けて大したデカダンになってきました。そんなことでフランスから帰るとき、日本自慢の富士山が豆のようにバカバカしく貧弱に見えたのです。」

連、六連に繰返されて異邦人としての心辭を表現している。讃仰的なる嵐の中のノートルダム ド パリのカタドラルは「あなた」と親近感をもって呼びかけられ、「聳え立つ・立つ」「黙り返つて聳え立ち、「一層その壮大さを感じさせる。嵐の叫喚のすさまじさが「ただ黙つて立つ、／＼吹きあてる嵐の力をどつと受けて立つ。」カタドラルの壮絶の姿を浮彫りにする。光太郎の造型的素質と音楽的感覚とが渾然一体となって嵐の中なればこそ一しお感動的なカタドラルの姿がいきいきと現出され、光太郎の感動がなまなましくほとばしり出る。

荷風は「伝通院」で「巴里にノートルダムがある。浅草に観音堂がある。それと同じ様に私の生れた小石川をば（少なくとも私の心だけに）飽くまで小石川らしく思はせ他の所から此の一区劃を色別させるものはあの伝通院である。」と述べ「ノートルダム」を心に留めて眺めたのは示されているし、「雲」に「黒く峻しいウエストミンスターを仰いだ心はノートルダムの軽快に驚き感された。」とある。この程度の関心である。ふらんす物語に取り上げられた場所が多いが、「雲」の外はノートルダムは「巴里のわかれ」に「朝日が早くもノートルダムの鐘樓に反射する」「大抵の人は遠く見て知つて居やう。犯し難い尊敬の中にも云はれぬ優しみを失はぬノートルダムの寺院は立つ。」（盛典街の夜）とある位である。

さて、「モーパッサンの石像を拜す」は、荷風の口説調である。永い思索の情を一気にのべたてている。「フランス語と自分とモーパッサンとか、わりから在米中の自分とフランス語・フランスを語り、「私は、どんな事をして、フランスへ渡つて、先生のお書きになつた世の中を見たい、もし、此の志が遂げられなければ、私は例へ、親が急病だと云つても日本へは帰るまい、と思ひました。この一念が、大西洋を前に叩へた紐育の商業界に、私を引止めて居た唯一の力でした。」と述べ、「私も一層、先生の著作を枕に書を飲まうとした事もありました。」とその苦しさを語り、イデスの事を語り、モンソト公園と石像と描写し、モーパッサンの心中を察し、「裂りに先生の肖像画を掲げたのに対して、先生は、わが著作は天下の公衆に属すれども、わが肖像はわれのみに属す、と憤慨された。又先生が其の師フローベールに寄せた私信の公にされたのを見て悲しまれた事もあつた。其れ等を思へば、私は深く、後世の人が故人の志をないがしろにする事を嘆きます。が、又一方で、如何に先生の天才に惚れるものが多いか、東洋の端々に生れた自分まで

が、今此処に、恋を捨て、までも遠くへ来てつて其の下に拜伏する事が出来る恩沢を察せられたなら、先生は苦笑しつゝも、後人の罪を許されるであらうと思ひます。」と書く。そして「私は先生のやうに、発狂して自殺を企てるまで苦悶した芸術的の生涯を送りたいと思つて居ます。私は、先生の著作を読み行く中に、驚く程思想の一致を見出します。」とその実例をあげ、墓参を告げて結んでいる。抒情であり、口説きであり、自分について洗ひざらう要を尽してモーパッサンに甘えかゝっている。荷風の生活感情が明白に説明されてもいる。

光太郎の詩の見事に比すと、何といつても若さが目立つ。身勝手な匂いが何となく深い、説明調が気になる。円熟の境地にあって永年心にあたためたものをまとめたのと、感動に任せて一気呵成に書いたものとの相違であるう。

#### 帰朝後の光太郎と荷風と

兩人がフランスの影響を多分に受け、フランスを受したことは前にもすでに触れた。

昭和四十五年四月十七日の読売新聞の「文化」欄、杉森久英の「東風西風世界の田舎者」のタイトルの文に「二十代の駆け出し編纂者のころ、萩原朔太郎のところへ詩の原稿をたのみにいったことがある。朔太郎は、……日本の伝統文化について評論を書いてもいいといった。……私は、日本文化は結局、世界の田舎者の独自の文化ではないですかといった。朔太郎はそんなことはないよといひ、……顔面神経をビリビリさせはじめたので、私はあわてて辞去した。その翌月、……競争誌に、朔太郎の「日本は世界の田舎者だ」といふ論文が載つたので、私は朔太郎先生、よっぽどお怒りになつたらしいと首をすくめた。いま私は花の都パリの、シャンゼリゼの街頭に立って、ルイ王朝の夢の跡、ナポレオン栄華のまぼろしを追うている。萩原朔太郎は「フランスへゆきたし、されどフランスはあまりにも遠し」と歌つたけれど、航空街の発達と観光思想の普及は、われわれのようにさしたる用のない人間をも、やすやすとフランスへ運んでくれるようになった。私が朔太郎に磨つた気持の底には、先生だって昔はフランスへ行きたいとおっしゃつたか、せに……と、変面を賣める気持があつて、それで朔太郎を怒らせたのかも

かにカテドラルであり、モーパッサンであるが、それはフランス文化の華なのである。彫刻家光太郎の眼にはカテドラルのすばらしさが、文学者荷風にはモーパッサンの天才が、あこがれとして、それぞれの作品に結晶したのである。フランス文化の真髓にふれ、そのすばらしさを事毎に感じとった光太郎、荷風が凝集的に象徴的にフランス讃仰を表現したものであると思われる。

ノオトルダム ドパリのカテドラルが歌いこめられている、「雨にうたるカテドラル」は大正十年十月作、帰国後十三年目に感動をまとめたものであり、雑誌発表の際は「巴里幻想曲の一」の附記がある。次々と作る意図のもとにまず、一番感動的なカテドラルを取り上げたのである。「モーパッサンの石像を拜す」は明治四十二年三月二十五日以前に書かれたものである。

光太郎は永年心にあたためてきたものを定着させたのであり、荷風は明治四十一年三月三十日の午後パルクモンソーにモーパッサンの像を見に出かけた時点より遠くない、直後であるかもしれない記である。「雨にうたるカテドラル」を読む時、感動の再現・再燃——十三年前の——という感ではなくて、直後の激しさを感じさせる。生々しさがある。十三年前では筆舌に尽し難い感動であったことがわかる。「松島の月まづ心にかかりて」と第一の関心を示しながら、感動のあまり句のない芭蕉のごとく。憧れのモーパッサンの記念像の下に、身を投げかけ、縋々と感慨を述べるのが生々しいのは当然かもしれない。ロマンティスト、センチメンタリストの面目躍如である。どちらにも青春の情熱と抒情とがある。どちらにも徹底した讃仰、心酔が見える。「……毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。／あの日本人です。……ノオトルダム ドパリのカテドラル。／あなたを見上げたいばかりにぬれて来ました。／あなたにさはりたいばかりに／あなたの石のはだに人しれず接吻したいばかりに。……風はわたくしの困日本でもこのやうです。／ただ聳え立つあなたの姿を見ないだけです。……わたくしの心は今あなたを見て身ぶるひします。／あなたのこの悲壮劇に似た姿を目にして、はるか遠くの困から来たわかもの胸はいつばいす。／何の故かまるで知らず心の高鳴りは／空中の叫喚に声を合せてただをのくばかりに響きます。……今此処で／あなたの角石に両手をあてて熱い頬を／あなたのはだにびつたり寄せかけてゐる者をぶしつけとお思ひ下さいませ、／酔へる者なるわたくしです。／あの日本人です。」の表現にはっきりそれらがうかがえる。吹きつゝのあめかぜの中をカテドラルに来て、人しれず石のはだに接吻をする光太郎の

熱い心がまざまざとよみがえっている。荷風は「そもそも、私がフランス語を学ぼうと云ふ心掛けを起しましたのは、あゝ、モーパッサン先生よ。先生の文章を英語によらずして、原文のままに味ひたいと思つたからです。一字一句でも、先生が手づからお書きになつた文字を、わが舌自らで、発音したいと思つたからです。」に始まり、全文これ恋文である。「私は此れから、先生の遺骸を埋めたモンパルナスの墓地に参詣しませう。私のさゝげる一束の花を受けて下さい。あゝ、崇拜するモーパッサン先生。」がその結び。ロマンティックでセンチメンタルな抒情、面と向つては言えないような情緒纏綿の一篇である。

嵐でさえも出かけてゆくカテドラル、巴里の停車場へ着くと、直ちにはせつける石像。どちらもドラマティックである。「毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。」の持続的執心、明治三十四年九月暁星学校フランス語科の夜学に通いはじめ、アメリカに渡つては英語などは願みず、フランス語を勉強し、渡米後二年、モーパッサンの創作を字書を頼りに読めるようになり、どうしてもフランスに渡りたいと思慕の明暮の後、やっと思ひかたつたという心に傾きつづけた憧れの実現、どちらも恋文である。文化遺産そのものと、像一人の違いはあるが。

詩は百五行の長篇、短篇の紀行随想。分量的にはほぼ等しい。憧憬の心を述べたことも相通う。創作時と憧憬の様相は異なる。しかし一番異っているのはその書き方である。

光太郎は智恵子夫人を得て、大正四年頃から彫刻に専心、詩作は少く、大正十年「明星」の復刊を機に再び詩作を活潑にしはじめた時期の作品で、溢れるような詩情を心ゆくまで迸らせたものであり、円熟充実した作風である。カテドラルそのままの造型的構築と壮観な嵐と共なる音楽的構成とが作り上げた見事さ。光太郎の感動と嵐とカテドラルと一分の隙もない。「おう又吹きつゝのあめかぜ」が大交響曲の序曲、この冒頭が六連中、一・二・四・五とくり返され、フィナーレはそのバリエーションの「おう雨にうたるカテドラル／息をついて吹きつゝのあめかぜの急調に」で、三連にはなく変化がつけられ、全く嵐の状況が活写されている。「おう又吹きつゝのあめかぜ」のリフレインが眼の前に聳え立つカテドラルへの嵐当りの強さを強調し、嵐の呼吸にびつたりなのである。私の感動は一連の「あなたを見上げてゐるのはわたくしです。」が三連にも繰返され、一連の「あの日本人です。」が三

い。兩人ともに東京で生まれ、育ったのである。もし京都に生まれ育ち、桂離宮や修学院離宮や名刹に親しんでいた生活であつたら、物量はともかく、精神的伝統の積み重ねだけは緩々として存在しているのを感じとって何らかの落ちつきを得ていたかもしれない。これは古都。新京、東京もあるというふうに。

光太郎は「はじめて異性に触れたのもパリ」とうぶであるが、荷風は「最初フランスに来た当座はどんな事をして自分も制する事が出来なかつた。三日間に一ヶ月の生活費を消費してしまつて居ながらまだ遊びたい。……決心した。一切フランスに居る間には手を出さぬ。何かの機会では思はれ慕はれてもしたら僕はとも再び日本に帰られなくなるかも知れんからな。……詩人肌になり美しいフランスの山水に酔はうと云ふ決心をした。」（祭の夜がたり）に片鱗がうかがわれる。「決心」しながらすぐ崩れる。「万事につけて、米因赴任当初のやうな生々した感興、身の顛ふ衝動を覚える事が出来ない。あゝ、好い女だと眠だけは引付けられても、心では、どんな無理をしてもと云ふ程の勇氣が起らない。」が「世の中は何と云つても、女でなくては夜が明けない」し「一度び誘はれるまま慾望を遂げて了ふと、最う二度と同じ相手を繰返す興味がなく、」「この辺を徘徊する売笑婦の大半は、何れも一度買つた事のある女ばかりなのに自分ながら呆れ」「潔白な、健全な、真面目な生活に、どうかして復帰したいものだ、しみ／＼思」うし、蕩兒の生活が繰りひろげられている「雲」に荷風の生活の反映が感じられる。「新しいバナマ朝、鼠色の胴衣、黒ずんだオリイブ色の綿地の背広に、はでな織模様の襟飾、手に持つ杖の銀細工が日の光にきら／＼する。若い貴族のお忍びの散歩姿とも云ひたい程」と、在アメリカ同様取つていたようである。「あんまり立派な且那過ぎるよ。」（霧の夜）、二人の若き女から話しかけられるのも「紳士よ」（基督）である。意識的なシャレ者、遊蕩兒の俤が浮び上る。光太郎の素朴、荷風の氣取り、瀟洒。

在仏生活のアウトラインが二人の同異を雄弁に語ってくれているが、例によって蛇足をつけた。

総括として光太郎の「雨にうたるるカテドラル」と、荷風の「モーパッサンの石像を拜す」との比較を試みたい。

### 「雨にうたるるカテドラル」と 「モーパッサンの石像を拜す」と。

在パリでの光太郎と荷風の感動が刻まれているのは同じである。

石像といへば、光太郎には「銅像ミキキツツに寄す」がある。巴里アルマ橋畔のブウルデル作のポーランドの流浪詩人の像に寄せる想を書いた。昭和十四年九月二十一日作。九月一日、ナチス・ドイツは宣戦布告なしにポーランドを攻撃し、二十七日に首都ワルシャワは陥落、ポーランド危しの際に行かれたものである。祖国独立運動の源泉となった愛國の詩、愛國の心、愛國の行動に、ブウルデルは愛と正義で、その像を作り、その像を光太郎は愛と正義とをもって書く。「憤りなるか嗟嘆なるか決意なるか。／ただ潜熱の如きもの身うちに痛きを覚える。」と「今も巴里アルマ橋畔に立つであらう君の姿を／遠く極東の一彫刻家は心にまがく。」のである。像に寄せるという点からはこの詩と比較することも考えられるが、発想の次元が異なるので見送った。

又、憤慨する「人」を考えると、モーパッサンに対して、光太郎にはロダンがある。ロダンについて書いた光太郎のものは多く、評伝「ロダン」をはじめ、詩も「車中のロダン」「後庭のロダン」がある。「車中のロダン」も「後庭のロダン」も設仰を露骨に書かない。「彫刻一途」に「日露戦争の勝敗よりも／ロチンとかいふ人の事が知りたかつた。」ほどであり、絶食に近い状態でロダンの本を買うという傾倒ぶりではあるが、二詩ともロダンのよき理解者、真の理解者として、渴仰は内に秘めている。大正十四年の作であり、大人の落着きがある。二詩ともロダンの面目躍如、描く光太郎の設仰と敬愛が、内に秘めたものが、にじみ出ている。こう見えてくるとやはり、「雨にうたるるカテドラル」と「モーパッサンの石像を拜す」と比較するのが妥当だと思われる。

光太郎にモーパッサン関係のもの、荷風にロダン関係のもので、注目をひくようなのがないのは当然である。「折々は美術館の戸口を潜つてロダンの彫刻マネーの画を盗じた事もあつた」（落葉）が荷風の関心の程度である。

「雨にうたるるカテドラル」「モーパッサンの石像を拜す」とも光太郎と荷風のフランス讃仰の象徴的作品といひ得ると思う。単なるカテドラル、モーパッサン個人と割り切ってしまうわけにはゆかない。表面は、具体的には確

し得るものではないと思ふ、……と云つて何も私が直ちに自分の文章に大和言葉を復活させやうとするのではないが、唯根柢に於いて正確なるクラシックを要求して居るのである。昨年日本へ帰つて以来、当今の日本文壇全体の調子が乱派であるのを見て、私は今の日本文壇に最も必要なるものは、正確なるクラシックであると感じて居る。(談)」「(我が思想の変遷一新潮)が荷風の得たものを明示している。又「思へば千九百七八年の頃のことなり。われ多年の宿望を遂げ得て初めて巴里を見し時は明るく日を待たて死すとも更に怨む如なしと思ひき。泰西諸詩聖の呼吸する同じき都の空気をばわれも今は同じく吸ふなり。同じき街の燄石をば嘗も同じくわれも今は踏むなり。世界的美妓名媛の摘む花われも亦野に行かば同じくこれを摘むことを得ん。われはヴェルレンヌの如くにカツフェーの盃をあげレニエーの如くに古城を歩み、ドーデの如くにセーヌの水を眺め、コッペエの如くに舞踏場に入り、ゴチエーの如くに画廊を徘徊し、ミユツセの如くに涙々泣きけり。かくてわれは世に最も幸福なる詩人となりぬ。如何となればわれは崇め祭るべき偶像あまた持つ事を得たればなり。十七世紀以後二十世紀に至る仏蘭西文藝史上に其名を掲げられしものは悉くわが神なりけり。……わが西洋崇拜の諸作は尽く日本文となりて日本の文壇に出づるや、当時文壇の風潮と合致する如かりければ忽虚名を贏ち得たりき。蓋し偶然の事なり。」(矢立のちび筆)も。百愛に似た崇拜ぶりである。「凡ては皆生きた詩である。極点に達した幾世紀の文明に人も自然も惱みつかれた此の巴里ならでは見られぬ生きた詩ではないか。ポードレルも自分と同じやうに、モウパッサンも亦自分と同じやうに此の午過ぎの木蔭を見て尽きぬ思ひに耽つたのかと思へば、自分は縦へ故國の文壇に名を知られずとも、芸術家としての幸福光榮は最早やこれで十分だと云はねばなるまい。」(巴里のわかれ)とその傾倒ぶりがそっくり描かれて居る。あくまでもロマンティックで甘い。夢の中で自己陶醉している。「現実に見たフランスは見ざる時のフランスよりも更に美しく更に優しかった。嗚呼わが仏蘭西。自分はどうかして仏蘭西の地を踏みたいばかりに此まで生きてゐたのである。」(巴里のわかれ)と命をかけての憧憬とそれが達成した時に「空想と現実」とは錯誤せず、幻滅の悲哀どころか「更に」すぐれていたのに、全くベタボレなのである。「巴里のわかれ」の終りにロンドンの記があるが、「一度び巴里の燈火を見たもの、眼には世界最大の都府ロンドン、何等の美的思想もなく、実利一方に建設された煉瓦と石

の「がらくた」に過ぎない。」と酷評している。「再会」で蕉雨に「僕も巴里に來た当座、二三ヶ月と云ふものは、矢張、非常な熱情に駆られたさ。……急に何だか淋しいやうな気がして來た……」「人間の最大不幸は、其の成功を意識した瞬間から始まる。」「あこがれる夢と云ふ夢は一時に実現された。いざ、何も彼も心のまゝになつて了ふと、……甚く勇氣を挫かれたやうに感じた。」「何んでも物は夢みて居る中に生命もある、香氣もある。それが実現されたらもう駄目だ。」といわせて居るが、荷風の心の投影が感じられる。案外素直に日本に引き上げた荷風の心の秘密がこの辺にあるのではなからうか。「自分はどうしても日本に帰りたいくない。巴里に留まりたいと同じ事を考へるのであつた。」にかゝらず。そして又、「雲」で「造化の美を奪ふ人工の巧み。あゝ、此れが巴里だと貞吉は思つた。……早く、一日も早く、自己の潜足と慾情の恍惚との中に一生を終へて仕舞ひたい」と書きながら「頓死、自殺」もせずに。又、「ローン河のほとり」に「自分は何の爲めに、自ら勇んで仏蘭西へ來たのであつたか知ら。何年此國に居られるのであらう。」とも無関係ではない。「得やうとして、得た後の女ほど情無いものはない。この倦怠、絶望、嫌悪、何処から來るのであらう。」(飲業)と「恋も飲業も、現実の無残なるに興ざめた吾等には何と云ふ楽園であらう。自分はリヨンの街は着いた其の翌日から、一日とても欠した事はなく独り物思ひに更ける爲め、此処に此うしてぼんやりして居る。」(ローン河のほとり)に荷風の心のすがたが見える。

光太郎は「故郷へ帰つた時の寂しさをも切に心配」したが、荷風とて同じである。「あゝ、再び見るわが故郷。巡查、軍人、教師、電車、電柱、女学生、煉瓦造りにベンキ塗り。鉄の釣橋、鉄矢來。自分はぼんやりと流されてはなくて、シンガポールよりも、それ以下の、何処かの殖民地へと流されて行くやうな気がする。」(悪感)と書く。光太郎より、もっときめつけている。文化の落差は如何ともなしがたく、一度、自由な高い空気にふれた兩人にとつて、同じ感慨が生じるのは自然であらう。過去の文化の積み重ねが、壮麗な都市美となつて居るばかりでなく、個人個人の生活もまた文化の積み重ねが感じられる。物質的にも精神的にも富の蓄積が感じられるフランスにあって、帰るのが、首都東京であるだけ、やりきれなかつたらうと察しられる。とにかく尖端をゆく東京、その物量的貧しさよ。日本の他の場所よりはましであるのに。まだ見ぬ首都東京であつたなら、救いはあつたかもしれな

燭園の途についた。

西遊日誌抄は米困生活に筆は多く費され、リヨンでは少く、パリでは稿には少しはあるが、抄には皆無である。大正六年丁巳早春記によれば、「或日書庫の棚取片付けんとする折不図西遊日誌四五冊あるを見出ししかゝるものは焼捨つるに如かずと直ちに後園に持出でしが梅花風に從つて雪と散り来る樹下に折からの鶯の声類なるにぞ物候く煙立昇らば可憐の鳥や鶯かんとそのまゝ樹下の石に坐し日記のところどころ読返し見るに感慨忽ち禁せず、薄暮迫り来るも猶巻を捲ふ事能はず。今はなか／＼焼きもすてられれば後日人の迷惑となるべきやうの記事を抹殺してもとの如く書庫に収めぬ。」とあるから、在仏時代のは断は下し難いが、差し障りのあることの方が多かったのかもしれぬ。短時日の間にあれもこれもと見聞したく、夢中に過したり、前述のように神経衰弱気味であったためか、在米の方が長期ではあり、フランスにあらざるあまり書く事も多く、念願のなかつたフランスでは、かえって書く事も少いともいえるかもしれない。或いは、念願のなかつた後の「空虚」かもしれない。

フランスに於いて光太郎も荷風も水を得た魚のごとくで、十二分にエンジロイしながら、吸収できるものは巾広く吸収している。

光太郎も荷風も在仏約一年、光太郎はパリ、荷風はリヨンと燭園前二ヶ月をパリで過した。この間に兩人とも一生に決定的な影響を受けたのである。

光太郎は本業の彫刻の真髓を悟り、詩人としての出発、開眼を、荷風は文学者としての道を確認した。

兩人ともに在米期間があつて、荷風にはそれが長い後で、歐洲を、フランスを眺めたことは、その比較において古い伝統のある文化のいしれぬ魅力を真にとらえ得たといえるであらう。荷風は「船と車」でフランス風土の印象を書いているが、アメリカの比較においてである。風土の比較さえてである。

兩人を比べてみると、芸術修業が目的であつたこと、在仏期間がほぼ同じ一年ほどであること、外遊の最終地点であつたこと、夢中に見聞し得るものはすべて見聞したことなどが同じである。違ふ点は、根本的には意識と人がらの問題であらうし、見聞、吸収の仕方、内容等、いろいろある。光太郎は彫刻の勉強が目的で、又、すべてであり、例によつて、詩や音楽やに手は出しているが、彫刻の勉強を思うさまやつた。光太郎の「神懸り」といわれるように夢中であつた。荷風の目的は文学修業であるが、銀行員として昼間

の時間はさかねばならなかつた。光太郎は高価な「アウギユスト・ロダン」を買うために水を飲み塩をなめざるを得なかつたが、荷風は生活費を得、文学其の他の勉強をし、燭園後は銀行以外に生活の道を得る準備をし、銀行退職後も二ヶ月、パリで遊びうる資力を持っていた。光太郎には有島生馬、山下新太郎、津田青楓、安井曾太郎、梅原龍三郎等の仲間がいて、「高村の神懸り」といわれたり、畑正吉は光太郎が百フランの「アウギユスト・ロダン」を買ひ、殆ど断食に等しい生活の時、わざわざ金を貸しに來たり、「自分の俸給を全部特別賞として私に提供された」ポオドラム氏のような人には違わなかつたが、インターナショナルなパリではあるし、心算しきつて存分勉強出來た。荷風はむしろ「自分ながら訳のわからぬ程、日本人を毛毳ひしている」(雲)のであり、リヨンでは光太郎のような恵まれた交友関係はなかつた。公用で姉崎囃風を訪ひ、パリで上田敏には逢つてゐるが、パリでは白瀧幾之助氏にも、「再会」の蕉雨である。ことばについては、光太郎は前述のようにフランスの女性と語字の交換教授をしているが、荷風は在米中フランス語の勉強が主であつたから、相当こなしてゐて語学力を試す機会であつたらうし、自信を得たに違いない。

光太郎は勉強に熱中してゐたから、この間、文学作品の発表はしていない。荷風は明治四十年十月、「春と秋」を「太陽」に発表してゐる。四十一年燭園後矢継早に発表し、四十二年に「ふらんす物語」として刊行した作品は西暦千九百十七年横浜正金銀行雇人となり米困紐育を去りて仏蘭西里昂に赴き此地に留ること十箇月余りなり。本書に収むる所の諸篇、短篇小説、紀行、漫録のたぐひは大概當時の印象を逸せざらむが為、銀行退職のかけ、公園路傍の樹下、笑声絃歌のカフェー、又棉航の船中に記録したりしを後に訂正し、前者に做ひてふらんす物語とは名づけぬ。」の序のように、在仏時執筆の大部分を占め、懐れのフランスでも荷風は自分の文学執筆は熱心であつた。

「里昂の出版店に転任する事にした。之が私の思想変遷の第二期であつた。フランス全体の空気は、私の心に一生涯抜ける事の出来ない程の深い感化を与へた。私がフランスに行つて見て、先づ第一に今まで替て知らない新しい事に感付いたのは仮令如何なる事があらうともクラシヤクの文学を閉却してはならぬと云ふ事である。これは単にフランスのみに限らず、凡てヨーロッパ諸國へ行つて見れば誰しも感ずる如であつて……又文章にしてもクラシヤクの土台の上に立つた文芸でなくては、何うしても正確なる人生の見方を為

ソオン河のほとりを歩む。……」三月五日 この日銀行よりいよ／＼解雇の命を受けた。——「此の日、公然と辞表を銀行に出して、断然関係を立ちたり。」(日誌稿)、と我意の通りになった。この日、父に手紙を書いてゐる。父に相談せず一存で辞職をした理由を、「当地の銀行内部は縦育銀行とは全く趣を異にし種々不快なる情実も有之候。若し此の情実習慣を無視して超然主義を取居る時はつまり周囲の評判不宣致從て銀行勤務も困難に相成候次第に有之候。銀行にては去年末已に書記を日本より雇入れ人数も超過致たる事なぞ有之從て小生は不用の有様と相成り候。又小生方にては去年十一月頃より體康思しからず一時は肺かと心配致候が其後医人の診断にて甚しき神經衰弱に罹り候由強ひて銀行には出勤致居候本年初めに至り聊か休養の必要を感じ一週間程欠勤致しつゞいて猶十日間休養仕居候。此等の結果銀行にては何分小生を荷厄介にするの体もあり又内々は支配人よりの勧告もあり故に断然一先辞表を呈出致たる」と述べてゐる。なお、銀行員が不適格なことをのべ、「在仏中は一方にて銀行より生活費を得一方にては語学その他の事を勉強し帰國後銀行以外に生活の道を得る準備半時も怠りなく致居候。其故自然読書過度の爲稍健康を害したるやと存居候。」と。荷風は銀行では居る場がないようにされ、自身も性に合わず、音楽や読書に熱心では銀行をやめざるを得ない。あこがれのフランス滞在を永くするために、忍ぶべからざるを忍ぶといつたことは荷風には出来なかつた。

「三月二十日 父の書簡来れり。いよ／＼帰國すべき運命は定められたり。兼ねて覚悟したる事ながら心今更の如くに驚き悲しむ事かぎりもなし。」と、二月一日付の手紙に対する父の返書は、独断進退は不可であり、リヨンよりの報告では、杜吉子に父語は勉強なれども文字の熱心に傾き読書に耽り銀行事業には余り熱心ならざるにやとのこと、支配人よりの忠告で辞職を決意したのではないか、しかし熟考の上、辞職願を取り消すこと、辞職許可までは執務すること、辞職の許可あれば直ちに帰國すること、一時の感情での辞職は不可、将来を慮り去就を決すべきこと、決意は先ず父にいうこと、とにかく従前通り執務すること、独断の辞職では差向の生活費帰國費は父から支給する義務もなく、好まぬ、万一帰國の場合は倫敦より郵船の特別三等で、運賃は着払とすること、私費の仏國滞在は不同意、送金はせぬことなどが書かれてゐる。運賃帰着払とは荷風が信用されていなかったこと、父の立腹の程などが察せられる。父の一方ならぬ配慮を荷風は生かすことができなかつた。

「三月二十一日 夜しら／＼と明けそめし頃ふと目覚めて夢とも現ともなく身の行末を思ふ。余は日本に帰るも父を見る事を欲せずいつこに姿をかくなすべきか。余が懐中には今些少の金あり再び縦育に帰りにイデスをたづね悪徳不良の生活を再演せんか。余は感へり苦しめり余は決断すること能はず。」——「國に帰りに貧苦の中に創作の筆を取らんか？はたニューヨークに帰りに余を待つなるイデスと罪行悪徳の生活を再演せんか？」(日誌稿)と思ひ感うのである。あくまで苦勞知らずの我儘な甘えん坊の心境ではある。但し荷風にとつては真剣な悩みであつたことはいうまでもない。「三月廿五日 余はいかにするも仏蘭西を去るが如き心地せず行李は今漸く取片付けたれど余は何となく巴里かどこかに終身滞留し得るが如き心地するなり。」と、希望的推測。「三月廿七日 銀行にては余に対して取りたる処置につき何となく氣味わるく感ぜしにや副支配人を余の下宿に來らしめ今宵いさゝか送別の宴を張るべしといふ。」浮世の義理とあきらめ出席し、帰途ローンの流を見るも今宵限りとラファエット橋の欄干にもたれて泣いてゐる。多情多感の若き才子の涙ではある。

廿八日、もう一日リヨンにと思つたが、パリ行の列車に乗り、「頗に帰國後この身の成行いかならんと悲しさに堪えず屢々酒を傾けたり。」である。「夜半十二時巴里に着す。停車場前の宿屋に一泊し明けなば拉甸区に移らんとす。」で西遊日誌抄は終つてゐる。日誌稿の方は二十九日、三十日、三十一日、四月一日、二日、三日、四日、五日、六日、五月二十八日、二十九日、三十日と簡単な記事がある。廿九日より連日昼は美術館やブルバール、プールス、マデレース、バルクモンソー、グルネルよりエトワール、トイルリーや墓地を訪ね、夜はオペラやオペラコミック、モンマルトル、オデオン座、コンセル、ルージ、コンセルルージュ、カジノモンマルトルなど遊び廻つてゐる。五月二十八日巴里を去るまでの二ヶ月、思いのままに愉しんだようである。「モーパッサンの石像を拝す」は三月卅日の午後バルクモンソーに出かけた時の記である。モーパッサンに傾倒してゐた荷風はパリにつくや出かけてゐる。「巴里見物で一番趣味のあるのは墓地の散歩だ。」と渚山宛に書いてゐる。「墓詣」が「ふらんす物語」の中にある。戦時中よく東京の江戸文人の墓を訪ねて歩いてゐるが、パリにあって作家などの墓を訪ねてゐるのである。パリのオペラと芝居は殆ど一通り見尽した。上田敏とも會つて交際してゐる。五月二十八日巴里をたち、ロンドンに夕方着、三十日十二時出帆

ている。このギョッとするような覚醒は、因籍を忘れていい気になっていただけ、痛烈であつたらう。「僕は生れて日本人である。……どんな気儘をしても、僕等が死ねば、跡に日本人でなければ出来ぬ作品しか残りは為ないのである。」(緑色の太陽)の声につながるのである。そしてパリに居る無意味を感じ、真に心の通いあう日本に帰りたいようになったのである。彼等の手の微動をすらすら解し得ない焦燥感、パリ滞在を切り上げさせ、四十二年一月二月あたりに帰国の方針をきめ、三月までパリに住み、帰国前にイタリヤ旅行をし、パリに帰り、六月ロンドンにゆき、阿波丸にのり、六月三十日神戸港についた。父光雲は神戸に出迎えている。「私は明治四十二年に巴里から急に帰国する事にした。まだ四・五年は帰らないつもりで居たのだが、勉強上に種々の疑問が起り、むしろ自分の故国で落ちついて勉強する方が正しいと思ひつめ、僅か一週間ばかりの考慮でその決心をつけてしまつた。」(よるこびの歌)という次第で「学成り」ではなく、その籍にいたばかりなのであつた。

彫刻・詩の開眼と、人生観・世界観・芸術観の基礎となる意識の目覚めと、スタートラインが整備されただけで、光太郎は日本に帰つたのである。本格的な勉強は故国でと態勢はついていた。

「兄は父からの帰朝を促がす手紙よりも、母の金釘流の筆でたどたどしく真情を吐露して来た手紙には真実胸を打たれてすぐ帰る氣になつた。」(光太郎回想 高村豊周)が語る一面も光太郎の帰国事情にある。

勉強の目標、態勢は整い、あとは自分で納得のゆくまでやればよい、自分でやらねばならぬと見通したのである。所謂大先生の直接指導——光太郎にあつてはロダン——を受ける道よりも、自分で研究する道を選んだのである。主体的に真に個性的な彫刻をいきいきとするためには、故国がよいと気づいたのも目覚めではあつた。

荷風は四十年七月十八日午前九時仏國汽船ブルタンヌ号に乗り、ハドソン河口を出発、廿七日夜十時に、アーブル港に到着して廿八日午前七時五十分発特別列車で巴里に入り、廿九日夕七時二十分の汽車で里昂に向い、三十日暁三時半に里昂に到着している。この間の事については、ふらんす物語の「船と車」に詳しく書かれている。その時の感想も明白に示されているが、たえず、アメリカと比較している。あこがれの巴里に近づくとつれて、「あゝ、この國に住む人は何たる楽園の民であらうかと思ひ、今ブラットフ

オームから往来へと出て行く旅客の中では恐らく自分が——出迎人も案内者もなく唯一人生れて初めて見る巴里の大都に入らうとする自分が一番早足に勇立つて歩いて行く男であつたにちがひない。」と書く。そして「何れ再遊の機会はあるとしても目のあたり、見られるだけは見て置かう」と見物して廻るのである。

里昂ではソオン河上の旅館で一睡し、正金銀行出張店に出頭した。ロオン河西岸のワンドオム街の下宿屋に八月二日移つた。

「正月元旦(四十一年)去年は殆ど日記といふものを書かざりしが今年より又書続ぐべし。今年の正月は思ふに余が海外に於て迎ふべき最後の新年にはあらざるか。わが愛する仏蘭西の最初最終の新年にはあらざるか。」とあり、西遊日誌稿には「正月元旦(此間破り取りテナシ)」「一字不明(ね)カ」(此間破りテナシ)新年であらう、「此間破り取りテナシ」(「一字不明」)には到底永く堪えられるべきでない、帰国か、自殺か?とあり、「正月廿三日 紐育なる素川君に長文の書を送る。要旨は余銀行の勤務到底忍ぶべからざるが故に辞職せんとするにつき善後策を相談しやりたるなり。」と。五ヶ月間のリヨン正金銀行出張所の生活は、日記を書く心の余裕はなかつたのか。とにかく日記を書き出した一日の時点で、荷風はリヨンの銀行マンの生活に愛想をつかし、見切りをつけている。落山宛の二通の手紙によれば、イデスとの文通、彼女に惱まされていること、短篇集出版に關してのこと、銀行出勤がつかいこと、夕方にはカフェーで音楽をきき、生き返り、夜毎にオペラに通学していること、オペラと音楽会通学で創作の時間がないこと、読書、さらにはフランス文壇のこと、故国の文壇のこと、フラパンスの旅やパリ行の予定などが書き送られ、在リヨンの生活が推察できるが、荷風なりに勉強して時間の余裕はなかつたようだ。この年の日誌抄及び日誌稿によると、オペラや音楽をきくにしばしば出かけているから、前年も同様であつたらうと思われる。在アメリカほどに日誌が詳しくないのは、フランス生活をむさぼつていたためではなからうか。

「二月一日 銀行辞職と決心し手紙を父の許に送る。」——「手紙を父及び松三子方に送る」(日誌稿)、「二月三日 銀行支配人の私宅を訪ひ辭職の意を告ぐ。」と事は急速に運ばれてゆく。「二月十九日 紐育素川君の返書を得るまでは如何にもして銀行に出勤せんと思居たりしが丙三日心気疲勞甚しく到底算盤をはじき簿記の帳面繰りひろぐる力なきを知り休みて午後より

めても手離さず、といった熱中ぶりであり、在仏時にはジュネチト・クラデルの「アウギユスト・ロダン」を「私の経済ではそれを買うことが出来ず、毎日のやうにオデオン座の廊下の本屋でそれをちよつと開いてみた。百フランといふと当時日本の四十円に過ぎなかつたのであるが、私にはそんな余裕はなかつた。そこで考へて毎日の食事を極度に減らして其を買つた。殆ど断食に等しかつたのである。」(ロダンの手記談話録)という次第であるのに、ロダンに密着して邪魔をするということはしなかつた。光太郎の人がらがここにもうかがえる。

「『ルーブル』はもとより、『リュクサンブール』の近代美術館、『グルニー』の歴史的美術館、図書館、『トロカデロ』をはじめ、『ノートルダム』其の他の寺院、セーヌ河畔、フォンテンブローの森、街角到るところにある記念碑、彫刻、墓地、一年中どこかでやつてゐる画廊の個展個人的コレクション、一年や二年ではとても見きれないものを毎日見たり、考へたりした。その間には友人とのカフェまゐり、夜の探險、オペラ、コンセル、オデオ、テアトル・フランセ、随分いそがしいことであつた。そしてロダン。そしてボードレール、ヴェルレーヌ。」(父との關係)といふ状況であつた。文化の吸収に、身体の中に火が燃えているように感じながら、血氣さかんな生活をした。「なんでも吸収してやらう。」と、又それに値するバリエであつた。

あたらしい意識に目ざめた光太郎は「『身体を大切に、規律を守りて勉強せられよ』と此の間の書簡でも父はいつも変らぬ言葉を繰り返してよこした。外で夕飯を喰つて晝室へ帰つて此の手紙を読んだ時、深緑の葉の重なり繁つた駒込の蕨の小さな家に、蚊遣りの煙の中で、薄茶色に焼けた石油燈の下で、一語一語心の底から出た言葉を書きつけられてゐる白髯の父の顔がありありと眼に見えた。……親と子とは實際講和の出来ない戦闘を続けなければならぬ。親が強ければ子を墮落させて所謂孝子に為てしまふ。子が強ければ鈴虫の様に親を喰ひ殺してしまふのだ。ああ、厭だ。僕が子になつたのは為方がない。親にだけは何うしてもなりたくない。……今考えると、僕を外國に寄来したのは親爺の一生の誤りだつた。……僕自身でも取返しつかぬ人間に僕はなつてしまつたのだよ。僕は今に鈴虫の様な事をやるにきまつてゐる。Rodinは僕の最も崇拜する芸術家であり人物である。が、若し僕がRの子であつたら何うだらう。此を思ふと林檎の実を喰つた罪の怖ろし

さに顔へるのだ。」(出さずにしまつた手紙の一束)は「父と子との問題はギリシャのこのかた、この世に於ける最もむづかしい、解決に苦しむ關係の一つである。」(父との關係)と戦後回想の最初の言葉で、光太郎の問題意識が明瞭に示されているが、パリにあって、父と子の人生観、芸術観の相違を自覚した時、光太郎のエディプス コンプレックスはどうしようもなくなくなつていたので。

そして又、「僕は故郷へ帰りたいと共に又故郷へ帰つた時の寂しさをも切に心配している。あの歴の出る着物を着て、蠟の生えた盤に坐り、SPARTIAの生活から芸術を引き抜いてしまつた様な乾燥無味な社会の中へ飛び込むのかと思ふと此も情なくなる。僕は天下の宿無しだ。しかし為方がない。今、此処で費してゐる無意味な生活よりもつと充実した一日が送れるだらう。」(出さずにしまつた手紙の一束)には、文化も生活も「落差」の大きい日本へ帰ることの危しさをかこつてゐる。パリの生活も無意味、故郷でも同化できないかもしれないぬ恐れを、光太郎は書かずにはいられたのだ。

ところで、彫刻、美術の勉強をし、詩、小説を読み、美術館通い展覧会めぐりをし、モデルを雇つて彫刻の制作をし、油絵をかき、留学中の若い日本の美術家たちとつきあい、食はずに水を飲み、塩をなめたりしてロダンの本を買ひ、体の中に火が燃えているような感じの充実したパリの生活がなげ無意味と書いたのか。「……それだよ僕が今毎日巴里の飲菓の聲の中で骨を刺す悲しみに苦しんでゐるのは。白人は常に東洋人を目して核を有する人種といつてゐる。僕には又白人種が解き解されない謎である。僕には彼等の手の指の微動をすら了解する事は出来ない。……僕の身の周囲には金網が張つてゐる。どんな談笑の中団樂の中に行つても此の金網が邪魔をする。海の魚は河に入る可からず、河の魚は海に入る可からず、駄目だ。早く帰つて心と心とをしやりしやり擦り合せたい。寂しいよ。」と「僕は故郷へ帰りたい云云」の前に書かれてゐる。確に困窮を忘れさせるものがパリにはあつた。しかし「立つて洗面所の前へ行つた。熱湯の蛇口をねぢる時、囚らず、さうだ、はからずだ。上を見ると見慣れぬ黒い男が寝衣のまま立つてゐる。非常な不愉快と不安と驚愕とが一しよになつて僕を襲つた。尚ほよく見ると、鏡であつた。鏡の中に僕が居るのであつた。『ああ、僕はやつぱり日本人だ。』 JAPONAISだ。MONGOLだ。LE JAUNEだ。』と頭の中の弾殻の外れた様な声が出た。」(珈琲店より)と自己嫌惡の自己凝視をや

人になり、魂の解放を得、彫刻を悟り、詩の真実を開眼したのである。

荷風とは異り、イギリス滞在が米・仏の間にはさまるが、「私はロンドンの一年間で真のアンドロ・サクソンの魂に触れたやうに思った。実に深味のある、領りになる、悠々とした、物に惹かず、あわてない人間生活のよさを眼のあたりに見た。そしていかにも『西洋』であるものを感じとつた。これはアメリカに居た時にはまるで感じなかつた一つの深い文化の特質であつた。私はそれに馴れ、そしてよいと思つた。」(父との関係) によつて、光太郎への影響が察知できる。

詩「よろこびを告ぐ」のリーチを友とすることも出来た。「私の敬愛するアンドロサクソンの血族なる友よ/シネクスピアを生み、ブレネクを生み/ニユウトンを生み、ダアキンを生み/タアナアを生み、ピアズレネを生み/そして又、オオガスタス・ジョンを生んだ血族から生まれた友よ/飽くまで正しい心と敬虔な魂とを有するわが友よ」と書いてある。いかにもイギリスらしいものを受容している。リーチに呈された詩は「磨顔者より」もあり、「寛仁にして真摯なる友よ」冒頭のリフレインで始まる五連からなる詩であるが、切々と心情を訴えている。萩原守衛とも合つた。パリから萩原がきて「ロンドンにいて彫刻ができるのか、ニューヨークなどについてロダンの解るということはある得ない。」(回想録)とけしかけられ、パリに移つたのである。

同じ「父との関係」に「ロンドンからパリへ来ると、西洋にちがいないが、全くの異質のものでない。自分の要素もいくらかはまじつてゐるやうな西洋、つまりインターナショナル的西洋を感じて、ひどく心がくつろいだ。紐育でヤロンドンでは自分が日本人であることをいつでも自覚しないではゐられないが、パリでは国籍をまつたく忘れる時間が多かつた。ジャポネーでも、シノアでも、ルーマンでも、そんなことを市民は問題にしなかつた。パリで私は完全に大人になつた。考へることをおぼえ、仕事することをおぼえ、当時の世界の最新に属する知識に養はれ、酒を知り、女をも知り、解放された庶民の生活を知つた。」とある。「フランスはえらいと思ふ事です。名高いすぐれた人は勿論だが、無学な女なぞに逢つて見てもイギリス人などとはぐつと遠つて居る。……ボヘミアの女ですが私の所に留はれて来て妙な顔をして居るから何だと訊ねると「金の為に自由が束縛されているのが悲しい。」と旨ぶのでせう。私も気味が悪かつたから留ひを解いてやりましたが、そんな取

るに足らん女までが自由を口にするんですからねえ。あその人間は何か事をやり出したら棄て針気味で、乗るか反るかの際れ業をやります。自由奔放の芸術が生れるのも故なきに非ずと思はれます。また外国へ行くならば私は矢張りパリへ行きたい。」と。

「感謝」という詩は、光太郎のフランス評価を簡潔にいい得て妙である。

ありがとう、フランス

わけのわかる心といふものが

どんなに人類を明るくするか

朝のカフェ オオ レネをついでくれた

一人のマダムのものごしにさえ

ああ、君はそれを見せてくれた。

真に生きる人間と文化の伝統を知り、真の「近代」に触れ、近代人としての情操を養われたのである。

「パリで成るフランス女性と語学の交換教授をする事になり、私はフランスの詩を暗誦によつて学んだ。ヴェルレーヌの『屋根の上に空あり』も其時初めて知つた。ポオドレネルには殊に驚いた。その美術批評を読む必要から彼のものを繕き始めたのだが、此の自己全存在を擲つての作詩態度にひどく打たれた。」(詩の勉強)、「私自身が詩を書いていいかしらと思ひ出したのは巴里でヴェルレーヌやポオドレネルの詩をはじめ知つた時であつた。それは甚だ身に近いことを感じた。」(某月某日)と「詩の開眼」がされたのである。カンパニーニエ ブルミエール街十七の地階アトリエにあって充実した生活が繰りひろげられた。彫刻・美術については有馬壬生馬、山下新太郎と一緒に訪ね、強く感動している。「パリにはロダンの現に居て、会場などでは時々見かけたが、そのアトリエを訪問する勇氣はなかつた。むやみと人を訪問して、仕事の邪魔をする無作法と厚かましきとは、私が父や祖父から固く戒められてゐた事である。」(ロダンの手記談話)と遠慮していたのだが、一緒に出かけ、「ロダンは不在で夫人に案内されてロダンの書斎に山積する素描を見せてもらった。」のである。明治三十六年からロダンの好奇心を持ち、三十八年には「アウギヌスト・ロダン」の本を手に入れ、寝てもさ

いい恰好をする。苦勞知らずのお坊っちゃんがいい気になって最大に羽をのばしている。「自分は飽くまで米国の実業主義には感化されないと云ふ事を見せたい」のでドーデかバイロンの真似をするのだが、「よいも悪いも泰西詩人の事と云へば随喜の誤に暮れる」という若さ、浮薄さ。自分を偽らず、正直に書いた所がやはりお坊っちゃんである。「落葉」は三十九年十月までの荷風のアメリカ生活が、そつくり描かれている。しかもソフトな詩情で優雅に。

自分にも甘え、読者にも甘え、それが快いのは、ひとりよがりながら詩情豊かであるからで、散文詩を見る思いのする箇所が多い。

光太郎は彫刻家詩人、荷風は小説家劇作家詩人、詩質は天性のものである。人がらと環境、生活感情の違いで、アメリカ生活の実のりはかくも違った趣を示している。光太郎は真摯、激烈、荷風は遊び、優雅。

同じセントラルパークが舞台であるが、かくも違う。如何なる面を如何なる角度如何なる心情で如何に表現するか、そこに兩人のアメリカ生活が象徴的に語られていると思う。

## フランスと、光太郎と荷風と

光太郎は五月にニューヨークを出発し、ロンドンへ向い、ブランディングの画学校に入った。図書館通いや見学に励んだ。

明治四十一年六月十九日正午英国を出帆、パリに移り、カンパーニュブルミエル街十七番地の地階アトリエに居を定めた。充実したパリの一年ほどであった。

二十一才、フランスから帰朝の美校助教白井雨山先生から、ロダンの彫刻を知り、好奇心を強くそそられ、二十二才、スタディオ二月号掲載のロダンの作品「考える人」の写真を見、ひどく心を打たれた。二十三才、九巻でカミイユ・モオクレネル原著の英訳「アウギュスト・ロダン」を手に入れ、寝てもさめても手離さず、暗記するほど精読し、「これこそ自分の歩むべき道だと思ひこんだ。」(ロダンの手記談話録)という光太郎はヨーロッパへ行くと、アメリカを切り上げ、まずイギリスに渡り、一年ほど居り、アングロ・サクソンの持つよきものを吸収し、フランスに渡ったのである。

## パリ

私はパリで大人になった。

はじめて異性に触れたのもパリ。

はじめて魂の解放を得たのもパリ。

パリは珍しくもないやうな顔をして

人類のどんな種族をもうけ入れる。

思考のどんな系譜をも抱まない。

美のどんな異質をも枯らさない。

良も不良も新も旧も低いも高いも

凡そ人間の範疇にあるものは同居させ、

必要な事物の自浄作用にあとはまかせ。

パリの魅力は人をつかむ。

人はパリで息がつける。

近代はパリで起り、

美はパリで醇熟し萌芽し、

頭腦の新細胞はパリで生れる。

フランスがフランスを超えて存在する

この底無しの世界の都の一隅にゐて、

私は時に国籍を忘れた。

故郷は遠く小さくけちくさく

うるさい田舎のやうだつた。

私はパリではじめて彫刻を悟り、

詩の真実に関眼され、

その庶民の一人一人に

文化のいはれをみてとつた。

悲しい思で是非もなく、

比べやうもない落差を感じた。

日本の事物因柄の一切を

なつかしみながら否定した。

「暗愚小伝」中の詩であるが、老境にあつて、まざまざとパリ滞在の意味を再確認したのである。国籍を忘れ、真の自由と個の存在を許すパリで、大

も荷風は見たこともあつたらう。光太郎は相手が欲しかったのだし、荷風は詩題ばかりを求めていたし、セントラルパークが心を慰めたり、満たしたり  
の場所であつたことは同じニューヨークにあつては、ありうることである。

荷風の「落葉」は岩波書店昭和三十八年版の全集によると七頁の小品である。ヴェルレーヌの「秋の歌」の詩境が誘発する「落葉」の詩境。「……自分は夕暮に一人、セントラルパークの池のほとりのベンチに寝かけた。日曜日の雑踏に引受へて平常の日の静けさ。殊に丁度今頃は時間の正しい園の事として何処の家でも晩餐をして居る時分であらう。馬車自動車は無論、散歩の人の足音も絶えて、最後の餌をあさり了つた栗鼠の鳴く声が梢に高く聞えるばかり。灰色に曇つた空は夜にもなれば雨か、夢見る如くどんよりと重く暮れはてゝ行く。湖のやうな広い池の面が黒く鉛のやうに輝き、岸辺一帯を蔽ふ繁りは次第々々に霞になつて、その間からは黄い瓦斯燈が瞬きはじめた。絶えずあたりの高い梢から細い木の葉が三四枚五六枚づつ一団となつて落ちて来る。耳を澄ますと木の葉が木の葉の間を滑り落ちて来るその響が聞きとれるやうに思はれる。木の葉同士が互に落殻を誘ひ囁き合ふのであらう。……ベンチの背に頰杖をついて自分は何やら耽る物思ひの中に、ふと詩人ヴェルレーヌが「秋の歌」と云ふのを思ひ出した。……あゝ自分は早や何処に何處異郷の地に埋るゝ落葉を眺めたであらう。上陸したその年の秋を太平洋の沿岸に、其の翌年はミソリの野ミンガンの湖辺ワシントン街頭に、やがてこのニューヨークの落葉も既に二度目である。去年始めてこの都会の落葉を見た頃には、自分は如何に傲慢で得意で幸福であつたらう。自分は新大陸の各地方の異なる社会異なる自然をすつかり見尽して了つたつもりで、これからは世界第二の大会社の生活を観察するのだと、無意味に自分を信用して、日曜日毎に、この池のほとりに来ては散歩の人の雑音を打ち眺めた。やがて木の葉は落尽した。寒い風が枝を吹き折つた。雪が芝生を蔽ひ尽した——芸界社交の時節が到来した。……よいも悪いも泰西詩人の事と云へば随喜の涙に暮れるあまり、人真似せずには居られない。自分はわざとこれも無造作らしく帽子を斜に冠り桜の枝の杖を片手に詩集の何かを小脇にして、稍しばらく己れの竹む姿を鏡に映して見た後、漸く外に出て、春の午後人の出盛る公園に赴くのである。例の如く池のほとりを一廻り歩み了れば、必ずソーキスピーヤ初めスコットやバーンズなどの銅像の並んで居る広い並木道に出て、ベンチに腰を下して、銅像と向合ひに悠然と煙草の煙を吹く。すると、何時

ともなく暖い春の日光に照される身のうつとり夢心地になるや否や、自分も巴にそれ等不朽の諸聖の列に加へられたやうな氣になつて了ふ。……遂には自分ながら妙に氣ままりが悪くなつて、ソツと身のまはりを見まはせば道の両側に並ぶ大樹の若葉の美しき。その梢から透き見える大空の青さ、晴れやかさ。道の左右に海の如く広ががつて居る芝生の緑りの濃さ、爽快さ、何処から流れて来るとも知れぬ花の香の優しさ懐しさ。恐らく、自分の一生涯、この時ほど幸福な事はなかつたであらう。眼の前には絶然と軽装した若い女が馬車を駛したり、馬に乗つたりして行過ぎるが、何れも皆自分の方を眺めては微笑んで行くとしか思はれない。自分は若い中にも猶若く、美しい中にも猶美しい女の笑顔を見つめると、沢もなく幸福な恋を空想するのである。……かやうに夢に耽つた春の日も一夏過ぎて……今は早や秋、飛散る木の葉を見ればさながら失へる恋の昔を思ふにひとしい。木葉もやがて落ち尽すであらう。寒い北風と共に劇界業界の時節も再び廻つて来るであらう。……然し自分は去年のやうに大胆な無法な幸福な芸壇の観察者として存在する事が出来るであらうか。また来る春には再びかゝる煙のやうな夢に酔ふ事が出来るであらうか。夢、酔、幻、これが吾等の生命である。吾々には絶えず、恋を思ひ、成功を夢みて居ながら、然し、それ等の実現される事を望んで居るのではない。唯だ実現されるらしく見える空なる影を追うて、その予想と予期とに酔つて居たいのである。……四辺は早や夜である。森は暗く空は暗く水の葉の影を眺めて居た。」(明治卅九年十月)と思ひ通りに生活し得る者のもつ明るさと優しさと高雅と氣取りと手前勝手とをふんだんに匂わせ、幸福感と夢幻感にみちている。「象の銀行」と比べる時、一層際立つて見える。愁をふくんだ美しい抒情、こゝろ文章が奮ける心情は苦悶の日常には縁が遠い。如何に幸福であるかは、荷風が明白に書いている。「傲慢で得意であつたし、ジャップといわれるどころか「怪装した若い女」が「何れも皆自分の方を眺めては微笑んで行くとしか思はれない。」のである。「夢、酔、幻、これが吾等の生命である。」などと書けるのは、現実の苦勞のない証拠である。劇界業界の時節には「種々な舞台を見て、世界古今のドラマを鶏呑みにした氣」になり、「自分は早くも将来日本の社会に起るべき新楽劇の基礎を作る一人」と思い、管絃楽を欣賞し、彫刻や畫を論じ、一かどの文化人氣取り。「毎朝頭髪を縮し太い襟かざりをばわざ／＼無造作らしく結」び、

## セントラルパークと、光太郎と荷風と 「象の銀行」と「落葉」と。

光太郎の「象の銀行」の詩は「セントラルパークの動物園のとぼけた象は」が冒頭である。前書に「窓の無い天井裏の小さな部屋に住んでみた。光線は天井の引窓から来た。市の中央公園に近いのでよく足を運んだ。」とあり、息のつまるような部屋、しかしそこよりゆく所のない根城、公園は光太郎の息抜きの場であったに違いない。アメリカ生活の不満を爆発させたこの詩。何かいうより詩を見るに若くはない。

セントラルパークの動物園のとぼけた象は  
みんなの投げてやる銅貨や白銅を、  
並外れて大きな鼻づらでうまく拾つては、  
上の方にある象の銀行にちやりんと入れる。

時時赤い眼を動かしては鼻をつき出し、  
「彼等」のいふこのジャップに白銅を呉れといふ。  
象がさういふ、  
そう言はれるのが嬉しくて白銅を又投げる。

印度産のとぼけた象、  
日本産の寂しい青年。  
群衆なる「彼等」は見ることがいい、  
どうしてこんなに二人の仲が好過ぎるかを。

夕日を浴びてセントラルパークを歩いて来ると、  
ナイル河から来たオベリスタが俺を見る。  
ああ、憤る者が此処にもある。  
天井裏の部屋に帰つて「彼等」のジャップは血に慄うつのだ。

大正十五年二月七日の作であるから、外遊からは二十年ほどたっているのにこの憤りは今日のように新しい。精神的にも物質的にも在米生活のみじめ

さがこの詩を書かせたのだ。読んでいて痛ましい。青年光太郎の心を傷つてる「ジャップ」扱い。孤独なだけに一層、こたえたことであつたらう。

「久振今村子と共に中央公園を歩み樹間のベンチに語る（四月八日）」「今村子と夜涼を追うて街を歩み中央公園に入りて樹下のベンチに休む。幽暗なる公園の樹間より燦爛たるコロンブスサークルの燈火を望み見たる夜のさま。畫にも筆にも尽しがたし。余は如何にして此色彩限りなき夜のさまを写すべし。やと独り沈黙して眺め入る事しばらくなりき（六月六日）」「新緑愛すべし。人なき公園の樹下に坐し携へたるモオパッサンの詩集を読みて半日を過しぬ。夕陽のかけ、新緑の梢にやうく深くなり行く頃あたりの木立には栗鼠の鳴き叫ぶ声物淋しく、黄昏の空の色と浮雲の影を宿せる広き池の水には白鳥の姿夢の如くに浮び出せり。何等詩中の光景ぞや。余は頭髮を乱し物に倦みつかれしやうなる詩人的風采をなし野草の上に臥して樹間に仏蘭西の詩集よむ時ほど幸福なる事なし。笑ふものは笑へ余は独り幸福なるを（六月九日）」「セントラル公園日曜日毎に緑蔭に音楽を演奏す。（六月十七日）」「……

中央公園の水辺に独り夜をふかす（六月十九日）」「夜の来るを待ちて共に（イデス）中央公園を歩み（七月八日）」「薄暮独り中央公園を歩む。十六丁目の門より入りたる公園内の広き草原は折から曇れる空模様突然北方の暗き大洋を望むが如き観あらしむ。余はいかなる故とも知らず無限の寂寞と悲愁に襲はれ独りベンチに坐して身のこし方行末の事思廻らして夜の来るをも心付かざりき（七月廿一日）」「終日中央公園の人なき緑蔭に潜みて読書す。時に手帳を取り出し日頃腹案せる長篇小説の筋書なりと書きつけたしと思ひしが何となく心のみいらだちて書く事能はざりき（八月廿六日）」「早秋なり。空晴れて風涼し。朝早くより公園の樹下に坐して手帳に短篇小説の稿を試む（九月二日）」「独り中央公園を歩むにエルムオークなどの樹木尽く落葉して深く小径を埋めたり。晩秋の空限りもなく暗れたる日独り寂しく落葉の道を歩むほど詩趣深きはなし。余はミソリ州なる小村の秋又ミソガン州なる果樹園の此頃を思出で、寂しくも又美しき夢に耽りて、時の移るを忘るゝ程に、秋の日は短く小径の瓦斯燈いつしか輝き出づる（十月十四日）」と西遊日誌抄には中央公園が舞台になって居り、よく出かけたことがわかる。セントラルパークと荷風とは関係が深い。「よく行つた」は光太郎も荷風も同様である。しかし生活感情が違うとかくも違ふかと驚かれる。荷風の味った風景を光太郎も見たに違いない。光太郎の心を留めた動物園もオベリスタ

枕に鴉片の夢を見るもよし、又は浮世の榮華などは何処にあるかと思ふやうな田舎の宗教生活、朝な夕な平和な牧場に響渡る寺院の鐘の音を聞くのもいいでせう。私は兎に角一通り米國社会の大体を見たからは此の上此の地に止る必要もない。」と「岡の上」の渡野君のことばは荷風の知っていたものでもある。「自分はこの四年間米國社会の見たい処調べたい処も、先づ大抵は見歩いたので。」(六月の夜の夢)とあり、かなり意欲的に諸々を流浪して歩いたのである。見聞をひろめ、文字の題材を手に入れるために。「雪のやどり」「夜半の酒場」「夜の女」「ちやいなたうんの記」「夜あるき」などなど、「醜」と云ひ悪と云はるゝものが、花や時よりも更に美しく且つ神秘らしく思はれて来る。凡ての罪業悪行が一切の美徳よりも偉大に有力に見え、真心から其れをば讚美したくなる。(「ちやいなたうんの記」の心と、何でも見てやろうの態度と、親の目の届かぬ解放感とで、荷風は思ふ儘に振舞えた。

だからこそ、「亜米利加は今わが第二の故郷となつた。」(六月の夜の夢)なのである。「さすがは新大陸の広袤たる、町から二理出るならば、何処へ行つても此う云ふ無人の境が現れ、此れに異郷の寂寞と云ふ主観的情趣を加味して見るので、樹木の茂り、水の流、空行く雲の有様は、凡て自分には一種云ひ難い悲愁の美を感じさせる。」と書き、又「ミソリ州の落葉の村、ミシガン州の果樹園の夕暮に忘れられぬ詩典を催され」(夏の海)と新大陸の風物にも親しみ、「自分は西洋人の肉体美を受する一人である。」から、ホームシックなどとは程遠いのである。光太郎は真面目で傍目もふらず、唯これ修業であつたから、ホームシックにかゝつたのであり、アメリカを去るに當つて特別の感慨もなかつた。「処が幸にも一度日本を去り此の國へ来て見ると、万事の生活が全く一変して了つて、何一ツ悲惨な理想を起させるものがないので、私は云はれぬ精神の安息を得ました。私は殆どホームシックの如何なるかを知りません。」(一月一日)と衣食住に困らぬ坊ちゃん荷風はいふのである。

光太郎は大正六年、アメリカでの彫刻個展を計画、資金調達に彫刻額布会を発表したが入会者が少なく、結局渡米は計画倒れになった。関心が示されたのはこの時ぐらい。「象の銀行」「白熊」が後年書かれ、戦争時の書かれた遠因がアメリカ留学であつたことは否めない。荷風の渡仏の際の感は一箇のセンチメントか。しかし「ローン河のほとり」ではイデスにひかれて「一

思ひにアメリカへ行つて見やうか」とも書く。が、「再会」に「その頃吾々は共に米國に居ながら米國が大嫌いであつた。と云ふのは、二人とも初めから歐洲に行きたいと思ひながら哲学の道や自活の方法には便宜の至つて少い彼の地には行き難いので、一先米國まで踏出して居たなら、比較的日本人留まつて居るより何かの機会も多からうと、前後の思慮なく故郷を飛出した次第であつたからだ。」又、「写真でのみ知る歐洲の市街の美麗と其の生活の詩趣深きを觀賞し、同じ海外で送る月日のまゝならぬを恨んで、八つ当りに米國社会の全体をば、殊に芸術科学の方面に至つては、さながら未開の國の如く罵り尽して、いさゝか不平を慰めるのが例であつた。何につけても吾々には米國の社会の余りに常識的なのが氣に入らない。」と書く。「西遊日誌抄」にも「米國の生活の更に余の詩情を喜ばすものなきを歎じ仏蘭西に渡りて……」とある。が、「あめりか物語」「西遊日誌抄」ともに米國の風物の詩趣をかなり描いている。恐らくどの面も荷風にとつては本當であつたと思われる。「東洋の野蠻國」なる日本より「余は空身を此の米國の隨悲にくらまし再び日本人を見ざるにしかじと思ふ事屢なり。」と書くほど「米國の風土草木凡てのものは今余の身に取つてあまりに親愛となりたるを。」であつたのである。個人主義自由主義を徹底的に身につけたことは勿論のことである。

「幸なるかな、自由の國に生れた人よ、と笑まざるを得なかつた。試に論語を手にする日本の字者をして論ぜしめたら如何であらう。彼女ははしたないものであらう、色情狂であらう。然し、自由の國には愛の福音より外には、人間自然の情に恃つた面倒な教義は存在して居ない」(市俄古の二日)と笑む。これは本心である。

在米生活のアウトラインで、大体、光太郎と荷風の比較は論をまたずに、イメージが浮かびあがつてくるが、以上蛇足を加えた。最後に、光太郎の在米時代をテーマに書かれた「象の銀行」と、荷風の「落葉」とが、同じくセントラルパークが舞台であり、共通体験が考えられるので、両者の比較をして見たい。

同じく異郷の公園に遊びながら、境遇の差が、かくも作品に反映するのかと驚くばかりである。関心をもつものも、向けかたも全く違う。

る明日にも家に帰るべきあわただしき知らぬ日の暮れ。水ながる今わが胸に  
ひたひたと濤たす思のどけきをもて」など、心のゆとりを感じさせる歌以  
外は同じく、調いのない、切実な訴えがにじむ。

明星五月号にはじめて詩を発表、「秒刻」である。六月号に「海鷗」(マ  
デル他三篇)、「敗關録」の(我千たび君を抱かむ他三篇)を発表している  
が、文学活動旺盛というわけではなかった。

「秒刻」は夢うつゝに、赤城の山と母の姿と昔の少女の声とを夢みる。「海  
鷗」の「マデル・豆腐屋・博士・あらそひ」、「敗關録」の「われ千たび君  
を抱かむ・君を見き・通れたる君は遣らばや・眠りてあれか眼覚めよか」は  
「マデル」が現実のモデルに寄せたものであるが、あとは、夢、幻想、回想  
の世界のものである。「豆腐屋」は東京の風物恋しく、アメリカにはない豆  
腐屋を想い浮べた。東京の下町生れらしい遊び方、金魚売でも首売でも竿竹  
売でもない。

「博士」は人間性無視と人間性回復との寓意が感ぜられ、「あらそひ」も  
夢の國、うつゝの國が意識に上る。「われ千たび君を抱かむ」は幻想、愛情  
に飢えた心があり、「君を見き」には「およばね小ばね、賑へる／＼のこる二  
日の松の内／＼あ、花柳の北窓に／＼我は沈みて、はで姿／＼鏡ひごころの戀人  
を、／＼見ては、眼に見ぬ君を見にける。」と故國の回想であり、「通れたる  
君は遣らばや」も「眼のあたり、ああ我が家は、／＼焼け落ちて余燭にむせぶ。」  
と遠くにあつて気がかりな我家の想いが夢の中に火事となつて現われ、「一  
毫の関りも無き／＼出来事に、其の夜ぞ我は／＼恐ろしき連鎖を見つる。」ので  
ある。「眠りてあれか眼覚めよか」は「夢なれば」の冒頭の繰返して書かれ  
た二連からなる詩、夢の世界なのである。在米中の詩九篇のうち三篇が「夢」  
の世界、「夢、うつゝ」が意識に上るのが一篇、二篇が「回想」の世界、「夢  
と回想」の世界の一篇、「幻想」の世界が一篇である。これは光太郎が「夢  
に見る」ことに投影される故國恋しさの心が示されている。現実の苛酷さが  
夢の世界、回想の世界を心の慰めとしたのである。

「私は家庭の希望で、実業家となる為め米國へ送られる事になつた。これ  
が最も顯著なる私の思想の変遷期であつた。外國の見慣れぬ風物とか、境遇  
の寂寞とか、凡て書物を離れて自己特有の感情を造つて呉れた。又今迄自  
覚しなかつた自分の性情を深く意識させた。」(我が思想の変遷)という荷  
風は文字を目ざして勉強している。だから書く。スランプもある。が乗りこ

える。仕事に追われて書けぬ。「十二月八日。余の生命は文学なり。家庭の  
事情已むを得ずして銀行に雇はるゝと雖余は能ふかぎりの時間をその研究に  
ゆだねざる可からず。……余は絶望すべきにあらずと自ら諫め且つ勵ました  
り。」なのである。荷風は結局「あめりか物語」と「西遊日記抄」を書いた  
のである。年譜によれば、荷風は明治三十七年一月には「劇界と劇評家」を  
「むさしの」に、四月「船室夜話」―後に船房夜話、五月「舍路港の一夜」  
とともに「文芸倶楽部」に、「二月の文壇」を「むさしの」に、七月「夜の  
露」を「文芸界」に、三十八年六月「岡の上」を「文芸倶楽部」に、「醉美  
人」を「太陽」に、十二月「市俄古の二日」を「文芸倶楽部」に、三十九年  
二月「強弱」―後に牧場の道―を「太陽」に、三月「夏の花」を「新小説」  
に、十月「長髪」を「文芸倶楽部」に、「夜半の酒場」を「太陽」に、四十  
年五月「雪のやどり」を「文章世界」に、「旧恨」を「太陽」に、六月「一  
月一日」を「大西洋」に、「オペラの「ファウスト」」―後に歌劇フォース  
トを聴くの記―を「新小説」に発表した。「春と秋」も五月廿五日浄書し巖  
谷小波に送っている。これは在仏時十月に「太陽」に掲載された。大部分が  
「明治三十六年の秋十月の頃より米園に遊びて今茲明治四十年の夏七月フラ  
ンスに向ひてニューヨークを去るに臨み、日頃旅宿に書き綴りたるものを採  
り集めて、あめりかものがたりと題し、讀んでわが恩師にして恩友なる小波  
山人巖谷先生の机下に呈す。明治四十年十一月里昂にて「永井荷風」という  
次第で、出版された。「書かでの記」によると、「あめりか物語は明治四十  
年紐育より仏蘭西に渡りし年の冬里昂市ブンドオム町のいぶせき下宿屋に  
て草稿をとりまとめ序文並に挿絵にすべき絵葉書をも取揃へ市立美術館の此  
方なる郵便局より書留小包にして小波先生のもとに送り出版のことを依頼し  
たるなり。」とある。

光太郎は一途に彫刻修業、しかも苦学であつたから、傍目もふらずにひた  
すらな毎日であつた。多方面の教養吸取の性来の癖はやはりで、イブセン  
例に凝つて、ナジモワ夫人の演技を五、六回天井浅敷で見、ほとんどセリ  
フを暗記したり、発声勉強のため俳優学校に通つたりはしたが、米大陸のあ  
ちこちを旅して過る余裕などはなかつたようだ。荷風はアメリカの風物を世  
態を見尽そうとした。「何しろ此の米國と云ふ所は人間社会の善悪の両極端  
を見る事の出来る所です。人は何方へなりと随意に好む方へ行く事が出来ま  
す。晝と云ふものなき秘密倶楽部の一室、真赤な燈火の下で、探美人の肩を

なし。」と荷風に夢中になってくれるイデスが居り、寢窟にも足をのぼすし、清純可憐のロザリン嬢とも仲好しとなり、「十月十六日……仏蘭西人の営める小料理店あり。……余は仏蘭西語にて給仕人に料理を命じ敬辞しつゝ、巴里の新聞を一覧す。余はこの淋しき海外の孤独生活を愛して已まざるなり。」と書きうる人間関係の豊かさを持っていた。学校に入りフランス語を学び、フランス婦人の家に下宿し、フランス料理店で食事をとり、フランス思想の情を満たす。病氣になれば広瀬医学士にかかり、叔父大嶋久次も紐育にくだる。正金銀行紐育出張所の就職も父のはからいで、ただ決心するだけ。「八月一日……君近頃銀行内の評判宜しからず解雇の噂さへあるやに聞及べり」と松三氏にいわれ「心大に憂ひ悲めり。」ながら、解雇もされず翌年七月二日には仏蘭西里昂出税所の見習雇を申渡されるのであり、終始父の配慮によって荷風には安全な自由気儘な米國生活が展開したのである。だから「米國の風土草木凡てのもの余の身に取てあまりに親愛となりたるを。」と解雇の噂を松三氏からきいた翌日の日誌に書くし、「嗚呼余は到底米國を去る能はず。」の心情なのである。仏蘭西思想のあけくれ、すぐ渡仏が出来ず悲しむが、遂には実現した。米國の自然に親しみ、風景を愛し、情緒に没り、オペラ、音楽、劇にあけくれ、流雷にふけり、作品を書く、父からの送金と後には銀行からの収入とで思う儘なる生活では「到底米國を去る能はず。」の孤独の生活なのである。羨しき孤独生活なのである。

光太郎と荷風の在米生活のこの差は吸収したものも違うのが当然である。江戸下町風の生活しか知らなかった光太郎は「其の頃の私は、見るもの聞くもの皆驚異であつた。」「私の精神と肉体とは毎日必ず『生れて初めて』のことを経験し、吸収した。世界中が新鮮だつた。」という。荷風にはこのような感を記したものは見当らない。父久一郎がアメリカ生活の経験者であるため、家庭の雰囲気の中にすでにアメリカ的なものがあつたであらうし、何不自由ない生活では精神も保護され、直接的な刺激を深く受けることはなかつたわけである。光太郎は旧江戸的生活の空気の中から、いきなり新天地に保護もなく飛びこんだのであり、すべてが「生まれて初めて」であるのも当然であつた。新鮮な世界で、苦悶しながら、夢中に暮しながら、貴重な体験をしたのである。荷風は穿ち異郷の流浪を詩的に楽しんだようである。「ポトマック河を隔て、華盛頓の市街を望見たる景、及び広漠たるヴァージニア州の高原を見渡したる眺望共によく客愁を慰む。」という風に。

光太郎は大陸を横断して紐育へ行ったのであるが、前途の不安感で、風景の味を心ゆくまで観じ得る情緒の世界は開けなかつたであらうし、紐育で彫刻の勉強と生活に追われている毎日では、人間関係の満を見ながらの孤独だけで、アメリカの自然に眼を向ける余裕もなかつたであらう。荷風は悠々とあちこち流れあるき、あるいは留まり、異郷の風趣を心ゆくまで眺めている。フランス思想の切なさが必要でもっともその味をかみしめたことだらう。

だから光太郎の得たものは「結局日本的倫理観の解放といふことであつたらう。祖父と父と母とに囲まれた旧江戸的倫理の延長の空気の中で育つた私は、アメリカで毎日常行動の基本的相違に驚かされた。あのつましい謙遜の徳とか、金錢に対する潔癖感とかいふものがまるで問題にならないほど無視されてゐる若々しい人間の感慨にまづ気づいた。私は社会的弱小な一ジャツプとして、一方アメリカ人の、徳善とまでは言へないだらうが、妙に宗教くさい、善意的強圧力に反感を感じながら、一方アメリカ人のあけつ放しの人間性に魅惑された。」のである。あくまで人間を離れない。作品も書く時間と心の余裕がなかつたせいも、多くない。「あしきもの退屈ふとするや我が船を父母ます地より吹く風」の渡航中の歌をはじめとして四十四首を明星に送り、明治四十年一月号に発表している。「アリゾナの鏡原なかに人住みて路見ゆちから世に尽くる無し。わが心をさなき道をひたゆきし日しもしのばゆ並木つづけり。冬の空とはいかづちす黄に枯れて一馬かげなき鏡原の牧。石崩の煙のはさまのほけ土も足るや花さき瑠璃の色し然などが叙景的叙情。」「秋立つと音する風はふるさとに似たる空より来てさむきかな。涙しぬ飼む水もゆくべくば家な恋ひそとありし母ゆゑ。石くだき黄金とる子は陶板す芸に行く身はこころ涙す」と郷愁が悲しく、「われ人を思ふ人また同じかれこの理不尽に日を追はれける」にアメリカに於ける人間関係の切なさが歌われる。儼にやさしき慰あふれる叙情はなく、何か寂寞とした寂しい悲壮な心情の訴えがある。鏡原・石崩の煙の風景が取り上げられ、涙しぬ、涙すとの直情的であり、理不尽を喝破する。心に潤いのない毎日の反映が、心に潤いを持ち得ない寂寞とした生活の反映が如実にあらわれている。四十年は八首。米英に滞在しているのであるが、明星に発表は七月なので、歌は在米中のものと思われる。「朝鏡やぬるき雨のしめり風海より吹きて初夏は来ぬ」は季節感を歌っているが、他の七首は心を見つめたものばかり、「此のここ

んでした……同じ銀行で働いてゐるアメリカ人は、私はまるで英語を知らない人だと思つて居たさうです。」(モーパッサンの石像を拝す)で、英語力については光太郎の方が心丈夫なのであった。

光太郎は岩村教授の紹介状のフレンチ氏、マクニール氏だけが領りであり、それも領りとはならず、自力で開拓したポオグラム氏が唯一の領み処であった。画家白磁燧之助氏、——この人には荷風も会っている。ふらんす物語「再会」の主人公といわれている。「三十八年七月六日 画家白磁燧氏を訪ふ 三十九年一月十五日、先年セントルイスにて相知りたる白磁燧之助を其の画室に訪ふ」——柳敬助氏など同じ仲間である米の人と会つたのが目立つ位で、身辺は淋しく、自身も心細い思いをしたことは前にも述べた。鉄道省の岡野昇氏が光太郎に小遣取をさせる気持で肖像を作らせた事があるのが一つの救いである。「せつかくの日曜日」を白熊の檻の前に立つてゐる「より仕方がなく、残留の吹きさらしのブロンクスパークが唯一の慰安所であつたという。セントラルパークにもよく行つたが、美術館も動物園もあり、埃及から買取つたオペリスクも立っていたが、みな金のおいがしたと、屋根裏の小屋屋のみじめな光太郎は書く。「セドルの給料から部屋代を払つてしまつて、寫のついた音のする金が少しばかりポケットに残つてゐる。」(白熊)の生活では、アメリカの富裕な生活は「金のにほひがした。」と滋味に見えたのは至極当然である。

広大な土地と豊富な資源と地味、天候にも恵まれて、富める国アメリカ、そこで母国の生活からはうんと低い生活を余儀なくされた光太郎にとつて、それは孤独と相まって、ただアメリカにおける最低の生活のみじめさだけではない、もっともっと輪をかけたものであつたことは想像がつく。「まるで世間を知らない、学校で育つたばかりの二十四才のお坊ちゃんだつた」のだから、余計にこたえたのである。語学力はあつても、訴える人のいないアメリカでは、他國産が同境である白熊や象にうさ晴らしの話しかけをさせる。「アメリカ生活は全くの苦学で、理想と現実とはあまりにもかけ離れていた。」(高村光太郎山居七年 佐藤隆房編)と後年語っている。「日露戦争の後なので数年前の排日運動の烈しい気勢はなかつたが、われわれが仲放して面目を立ててやつたのだといふやうな顔には絶えず出会」い、「動物は決して「パロージャップ」といはなかつた」(白熊前書)と、ジャップといわれる情無さを始終味つていた。「門の前の往來を水道のパイプで洗つてゐた時、通り

がかりの者が「ジャップ」などと言つて私を情なからした時も、先生の眼を見るとまるで何事も忘れる位だつた。」(彫刻家ガットソン・ポオグラム氏)とポオグラム氏を除いては、人間性無視の人間差別と孤独の日々を味わつた。ポオグラム氏には敬慕の情を持ったが、大多数の「彼等」には反感し、憤り、残念に思つた。そして孤独をかみしめたのである。二十年程たつて「白熊」や「象の銀行」が書かれたことがそれを示しているのではなからうか。在米当時、冷静に客観的に書きうる心境ではなかつたのである。二十年経過した「白熊」も「象の銀行」も在米當時をなつかしく想起してという感ではない、なまなましい憤りがぶつつけられてゐる。在米中、その渦中にあつては、寂寥感、孤独感、屈辱感に心身をさいなまれ、生活と彫刻の勉強とに迫られていて、詩の生まれようがないのは当然である。

在米中の作品は数が少いだけでなく、心中の淋しさが語られたものが殆どである。生活の反映がそこにある。

荷風は父久一郎がプリンストン大学留学でアメリカ生活の経験者であり、家庭生活にも洋風がとりいれられており、「十畳の居間に椅子卓子を据え、各はストオグに石炭を焚き……役所より掃宅の後は洋服の上着を脱ぎ海老茶色のスモーキングジャケットに着換へ、英國風の大きなパイプを啣へて読書」の父であり、母はクリスチャンである。父は官吏として、又郵船の幹部として顔が広く、アメリカの荷風は何の心細さも感じなくて済んだ。荷風はアメリカに到着すればすぐ宿舎が用意されており、古屋商店の山本支配人やその使用人の中にあり、日本から輸入された書籍雑誌は自由に読めるし、「十月廿四日 舍路港に赴き知る人を得ねんとて」と知人も居り、「九月廿二日 去年の今日横浜港を去りしなり。客裏一年は忽過ぎぬ。」と書けるほど思はれた海外生活である。聖路島の万博見物も古屋商店支配人外同行者があり「三十八年一月廿七日 家尊郵船会社の処用を帯びミネソタ号に乗じて太平洋岸の舍路に來りしが数日前再び同船にて帰航の途につきたりといふ。」と父久一郎も米國にきている。荷風はカラマツに在り逢うことは出来なかつたけれども、キングストンでは今村氏、ニューヨークでは従兄永井松三氏、松三(兼川)氏は荷風のよき相談相手であり、松三氏の忠告はよくきいたやうである。そして日本公使館雇。高平公使、館員一同、小使、コック夫婦、日本人の中にあり、「終日欣然として働きたり。」という次第。

「十月十六日……得がたき感に逢ふ。余は明日を待たて死するも更に憾み

は余の元來嗜む如なるを。」とまで書いていた。

八月一日、永井松三から銀行内の評判悪しと云き、此一冬銀行に雇はれ歌劇と音楽を聴くべき切符代を得たいと思つていた荷風は悲しんだ。「八月二日 遠からず日本に呼戻さるべき運命は將に其の一步を進め来らんとす。混乱せる余の胸中には第一に余は如何にしてイデスと別るべきか。別れて後いかにすべきか。第二は余は帰國の後何をか為すべき。銀行解雇となりたる余は何の面目をもて父に見ゆべきか。第三に余は帰國の後果して文壇に立ち得べきや否や。第四に余は米國を去りて日本に帰らし後當時を思ひ出で立返らざる追憶の念に泣く事なからんか。此れ等の問題に連続して其の回答を求めんとするなり。嗚呼余は到底米國を去る能はず。敢て一女子の爲めと云ふ勿れ。米國の風土草木凡てのは今余の身に取りてあまりに親愛となりたるを。」と住めば都の情を切々と述べている。八月十一日には永井松三にすゝめられ、その新居に同居した。荷風の放埒な生活のコントロールにもなればとの永井松三氏の心遣いか、或は父のはからいもあつたのかもしれない。

八月廿五日には下宿していた仏蘭西の老婦人宅を訪れ、「余は紐育の炎暑殆ど忍ぶべからざるにつけて今は仏蘭西の芸術のみならず其風土を慕ふ心日にまし烈しく成り行くなり。去年の夏余は華盛頓府より如何に熱誠を籠めたる手紙を父に呈せしぞや。然れども父の心は依然として木石に等しかりき。余は遂に仏蘭西を見る事能はずして空しく米國より早晚日本に呼戻さるべき身と思へばデートルの娘が仏蘭西函もて物語る巴里のはなしは聽て余の身に取つて何物にもかへがたき形見となるべし。」とまで書いていた。

八月十五日にイデスは紐育に引移り、日曜毎のデートを約した。九月十六日、前日より発病臥床していたが「仏蘭西の土も踏み得ずして東洋の野蠻園に送り帰さるゝ此身は長く生きたりとて何の楽しみもあらん。」とイデスの許に出かけている。引きつゞき病氣で九月廿六日「余は病院に入りて無益の金を費し全快して日本に帰らんよりは寧ろ家をも何物をも見ざる死の國にこそ行きたけれ。南欧の空見たしと思へばこそ此の世に未練はあるなれ。其の望今は早や絶えたいれば生命は惜しからず。」とも書いたが、全快し、十月五日に銀行に出勤している。元氣になると「余は毎朝銀行に赴く時背き空と明き日光とを打仰げば一度は自殺せんかと思ひ煩ひたる憂悶の情も次第に散じて、恣に芸術に深くこの世の生命を棄まんとする勇氣おのづから胸中に湧来れり。」(十月十二日)の心境となり、十一月には三、十、十七、廿六、

廿八、廿九日、十二月五、八、十、十五、十七、廿八日とオペラや音楽や劇の鑑賞に通つてゐる。現金な坊っちゃんであつた。

「四十年正月一日……抑も余が生涯何ぞかく意外の事のみ多きや。余の米國に來りし事既に意外なり。新大陸の諸如に彷徨し緑蔭深き華盛頓の街頭に因らず金髪の一女に逢ひ迷ひに別るべからざる情縁に悩む。実に意外なり。一度父の命により正金銀行の雇人となり算盤を把る事早くも二年未保雇せられず。実に意外なり。余は秋風に飄へる落葉の如く運命の導く如に行かんのみ。……」との所懐を述べている。四、五、九、十二、十六、十九、二十、三十、二月二日という風に七月まで主としてオペラを聴いている。

その間、一月十七日に再び仏人デートル嬢の下宿に移り、朝夕美しいフランス語を聞き得ることを喜んでいる。

二月十日 叔父大嶋久次官命を帯び欧米視察の途次紐育に來る。旅館に赴き安否を問ふ。所謂浮世の義理已むを得ざればなり。余は遠く故國の伝統習俗慣あらゆるものより隔離して天涯千里の異域に放浪孤獨の悲愁を愛する身なり。突然故國の消息に接して為めにこの云ひがたき悲愁の夢を破られん事を恐れ談話もそこ／＼に逃ぐるが如く旅館を去る。」と、荷風の生涯を通した孤獨の思いが、異郷にあつてさへ述べられてゐる。

七月二日 ……銀行本店より通知書あり仏蘭西里昂出張店に見習雇一名入用なるにつき即刻紐育出張店の余を其の方へ向くべしとの事なりと云ふ。此の日の午後日本よりの後便にてこれ等の事凡て余が父の斡旋によりし事を知り得たり。感激極りて殆ど言ふ如を知らず。」と。父への感謝が短いことばで印象的に示されている。イデスとの別れにも「あゝ然れども余の胸中には最早や芸術の功名心以外何物もあらず、イデスが涙ながらの機言聞くも上空の空なり。」(七月九日)と多年あこがれのフランス行実現の喜びで心ここにあらずであつた。

以上が兩人の在米生活のアウトラインであるが、相当に差がある。

光太郎は一年余、荷風は約四年。長いだけ曲折が荷風の方に多い。兩人とも孤獨であり、父の配慮の下にあつたことは共通であるが、様相は随分異つてゐる。

光太郎は「僕は英語は相当達者だつた。学校時代から神田の正則英語学校に通つてゐたので英語には自信があつた。」(美術学校時代)であり、荷風は「私は上陸後二年程たつても、アメリカ人の会話を聞き取る事が出来ませ

晩華盛頓を去らば身を紐育の陋巷に墮まし再び日本の地に帰る事なかるべし。」

とフランス行の同意を父から得られず、失望し、自暴自棄の心情を偲いでいるが、父子相廻というより、荷風の父への甘えからくる歎きであった。父の心を熟知しながらも従えず、わが道を選ぶ荷風である。九月十三日、カフェーなどで歌い踊る女、イデスと出合い、同廿三日再び仏蘭西行不同意の家書に接し「今は読書も健康も何かはせん。予は淫楽を欲して已まず。淫楽の中に一身の破滅を冀ふのみ。先夜馴染みたる女の許に赴き盛にシャンパンを倒して快哉を呼ぶ。」状態となった。十月末で公使館は不用となり、十一月二日紐育に帰り、「米国人の家庭に住込み如何にもして渡欧の旅費を得んと欲しながら、思わしい就職口もなく、カラマツへ引き返した。十一月廿四日に家書が転送され、正金銀行頭取に父が荷風を、紐育正金銀行出張所の事務見習員にと依頼した由が記され、「余は米因に在る事既に三年なりと雖も商業に関しては学ぶ如全く無し。正金銀行に入るとも長く其の暇に堪へ能はざるや明かなり。」と決心もつかぬ所へ、三十日、紐育出張所支配人より電報あり。イデスとの再会に便なりと考え受諾。「今日この田舎を去らば永く文芸の道に違さかるべき事を受ふるが故なり。読書は苦痛なり而も又一の慰問たり。」とカラマツを去りがたく思ひつゝ三日出発。四日紐育に着き、永井松三と相談している。「十二月七日 嗚呼余は遂に正金銀行に入りたり。余にして若し此度父の望める銀行に入らば永久父と相和するの機会あらざるべしと素川子の忠告によりて流石に我儘も云兼ねたるなり。美の夢より外には何物をも見ざりし多感の一青年は忽ち世界商業の中心点なるウォールストリート銀行員となる何等の滑稽ぞや。」と初出勤し、翌八日には「余の生命は文学なり。家庭の事情已むを得ずして銀行に雇はるゝと雖余は能ふかぎりの時間をその研究にゆだねざる可からず。云々」と一時文芸に違さかる事を思い罪悪感をもち墮落感をもった。

十四、十五、十八、廿三日と観劇し、「そも／＼余が最初海外の旅行を思立ちたるは西洋劇の舞台を看ん事を欲したればなり。……余が渡航の目的は違せられたるなり。」(廿三日)と書いてある。明けて三・四日はオペラの台帳を読み、五、六、八、廿二日、二月三、十六、廿二日 三月二、六、十日とオペラをきゝみ、十八日は管絃楽をきゝ、十九、廿四日は観劇している。「余は故園に在りし時の如く冷然たる評家の眼を以て劇を見る事能はずなれり。亜米利加は全く余をして多感の詩人たらしめし歟。」(三月廿四日)と

いう次第である。

三十九年一月七日、仏蘭西語の練習のため、仏蘭西婦人の家に下宿した。「春の海は空と共に宵々と晴れ渡りたれば湾頭に屹立するかの自由の女神像はいつよりも更に偉大に打頭まれたり。余はこの湾頭遙に大西洋を望めばまだ知らぬ仏蘭西の都と其の芸術の恋しさに今の我が身の果敢なきを思ひ無量の悲愁に打沈めらるゝを常とす。あゝ何事も思ふまじ何事も見まじとて急ぎ銀行に帰る機嫌の上に顔ひたと押当てぬ。」(四月廿三日)とフランスへの慕情は切であった。五月廿五日「春と秋」を浄書、小波に送り、同廿七日「長髪」を木曜会に送っている。「……何等詩中の光景ぞや。余は頭髮を乱し物に倦みつかれしやうなる詩人的風采をなし野草の上に臥して樹間に仏蘭西の詩葉よむ時ほど幸福なる事なし。笑ふものは笑へ余は独り幸福なるを。」(六月九日)と歯の痒くようなフランスへの傾斜を示す。モオパッサンの作を読み、六月廿七日には仏蘭西語の夜学校に通っている。食事も仏蘭西料理店という有様であった。

六月十一日「雷の宿」を浄書、太陽に寄送。七月廿二日「夜半の酒場」を草し、四十年一月六日「旧恨」を書いた。

銀行の勤務の苦痛を増すと、荷風は支那町の魔窟へも出かけている。「余は光明と救ひの手を要求せず。余は彼等と共に一掬の鴉片を服すべき機会を待つのみ。」(六月二十日)とあり、「六月廿九日 家書に接す。家庭の事情は遂に余の文学者たるべき事を許さざるに似たり。余は再び家に帰らざるべし。旅館のボーイか然らずば料理屋の給仕人如何なるものにも姿を変へ異郷に放浪の一生を送らんかな。……」の心境にある時、七月八日イデスが来り、「今余の胸中には恋と芸術の夢との、激しき戦ひ布告せられんとしつゝあるなり。余はイデスと共に永く紐育に留りて米国人となるべきか。然らばいつの日か此の年月あこがるゝ巴里の都を訪ひ得べきぞ。……」と悩み、「七月十日 彼の女がこころを去らず。余はさまざま／＼有れもなき空想に包まるゝ身とはなれり。そも／＼余が父は余をして将来日本の商業界に立身の道を得せしめんが為め学費を惜しまず余を米因に遊学せしめしなり。子たるもの其恩を忘れて可ならんや。然れども如何せん余の性情遂に銀行員たるに適せざるを。余は空身を此の米因の陋巷にくらまし再び日本人を見ざるにしかじと思ふ事屢なり。イデスはやがて紐育に來りて余と同棲せんと云ひしにあらざや。余は娼家の奴僕となるも何の恥るゝかあらん。かゝる暗黒の生活

のほどありがたきものは無きかな。」と知人も居ない異國での一人ぼっちの心細さを書いている。ホームシックの感なきにしもあらずで、詩「秒刻」に赤城山登山の回想と母への想いとを、窓の無い天井裏の小部屋に住んでいた時書いたのだが、母恋しと叫ばない抑制した表現が可憐でさえある。語学力があり、筋の通った一徹さがあったので、ノイローゼにもならず、道をひらいていったのである。

「殺戮主義的温情のいやしさは彼の周囲に満ちる。／息のつまる程ありがたい基督教的唯物主義は／夢みる者なる一日本人を殺さうとする。」「白熊、印度産のとぼけた象、／日本産の寂しい青年。／群集なる「彼等」は見るがいい。／どうしてこんなに二人の仲が好過ぎるかを。……ナイル河から来たオベリスクが俺を見る。／ああ、憤る者が此処にもある。／天井裏の部屋に帰って『彼等』のジャップは血に硬うつのだ。」(魚)に在米中の心境は鮮かに示されている。強大な物質主義文明、資本主義、そして偽善。ジャップとしては息のつけない人間性の圧迫。孤独で、必要経費の保証のない生活であるだけ、一層ひしひしと心を噛んだのであり、後に戦争詩を一途に書かせた屈辱感さえ抱かせたのである。

荷風は明治三十六年十月十日、タコマに上陸し、父の配慮で古屋商店のタコマ支店支配人山本一郎宅に寄寓。同月二十日タコマ・ステイディアム・ハイスクールに入学、約一年間ここで過ごし、仏蘭西語を学んだ。山本支配人と父久一郎とは熟知であり、荷風は優遇され、支店の奥のカウンターの椅子で終日、日本から輸入された書籍雑誌を読み、「船中夜話」「舍路港の一夜」などを書くなど、思うままな日を送った。「船中夜話」は渡航船中の話、三十七年四月文芸倶楽部に発表、「舍路港の一夜」は五月同誌へ発表した。荷風の生活は父の意図に沿ったものではなく、「垂米利加に來りてより余が胸裏には芸術上の革命漸く起らんとしつゝあるが如し。近時筆を執れども一二行すら満足に書き能はざるは蓋此の如き思想混乱の結果たらずんばあらず。余はゴーチエーの如き新形式の伝奇小説を書きたしと思ふ念漸く激しくなれりと雖も未だ其の如く十分ならず徒に苦悶の日を送るのみ。余は従来書き來れる日文一致の形式につきても亦大なる不満足を感じ出せり。身海外に在るが故にや近頃は何となく雅致に富める古文の味忘れがたく行李を開きて平家物語榮華物語など取出し独り爐辺に坐して夜半に至る。」(三十七年一月五日西遊日誌抄)と、実業方面の勉強などは念頭になく、読書三昧の日を送り

外国文学も乱読した。タコマ花柳界の消息も知るようになっていた。「新聞紙日露戦争開始の電報と共に旅順港外に於ける露艦沈没の記事を掲ぐ。」(二月九日)「旅順口陥落の報あり。」(三十八年一月二日)「華盛頓日本公使館にて身許正しき小使一名入用なりとの事を聞込み素川子に其の周旋を依頼したり。これ近日日露議和談判開始せらるゝに付自然公使館の事務多忙となれるが為なるべし。」(七月十七日)の記が日露戦争に関してはあるのみで、異郷にあっても、関心は薄く、文学芸術で心は占められていた。もっとも光太郎も日本にあって「日露戦争に私は確かつた。／ただ旅順口の悲惨な話と／日本海軍の号外と、／小村大使対ウヰンケッ伯の好対照と、／このくらゐが頭に残つた。」(彫刻一途)と彫刻の真をつかみたくて、彫刻に明けくれていた。荷風はタコマ公園や近郊の牧場や舍路港やオリンピア港などに遊び、

「余は遠き以前より自叙伝を作らん事を思ひつゝあり。此地に來りてより創作意の如くならざれば此を機会に自叙伝の稿を起さんかと思ひ参考の爲にもとまづトルストイが自叙伝幼年の著を次第に読み始めぬ。」(三十七年九月二十三日)であり、十月八日には聖路易市万国博覧会に赴いた。この際も古屋商店シアトル支配人と同行している。十一月二十二日カラマツに着き、翌年の六月十五日まで滞在、カラマツ・カレンツの彫生となり、フランス語を学んだ。十二月廿八日、「岡の上」を脱稿、木曜会に送っている。カラマツの生活は荷風には楽しいものであったらしく、風景と情緒とを愛したことが、日誌に留められている。三十八年六月十六日、キングストンの今村氏宅へ赴き、滞在している。七月八日「素川子と四方山のはなしの末余は米國の生活の更に余の詩情を喜ばすものなきを歎じ仏蘭西に渡りて彼の國の文字を研究せん事の是非を問ひぬ。子は大にこれを賛成し先づ其の旅費を才覚すべく暑中休暇を労働に當つべしと云ふ。余は直にヘラルド新聞に奉公口を求むる広告を出しぬ。」とフランス行を相談し、賛成を得、その周旋で華盛頓の日本公使館の雇となり、旅費の一部にしようとした。「余は日露談判終了の日までこゝに労働し其の給金と故國よりの送金とを合算して秋風と共に一廻大西洋を超えて仏蘭西に行かん」とす。(七月十九日)がそれを明示している。然し、「八月廿九日 家書に接す。父は子の仏蘭西行はいかにするとも同意しがたき旨申來れり。遺父と余との間には何事も同意せられざるなり。失敗と失望とに馴れたる余は今更に何の驚き歎く事あらんや。余は早

# 「高村光太郎」ノート その八

高村光太郎と永井荷風と (III)

井田康子

## 外国と 光太郎と荷風と

アメリカと、光太郎と荷風と

光太郎は、明治三十九年二月三日節分の朝出立、一ヶ月許りの海路陸路の旅をして、ニューヨーク五番街の素人下宿に落ちつき、アカデミー オブ デザインの夜学に通った。アメリカに着いてすぐには、自活勉学の道は開けず、「父からもらつた二千元は千弗に当り、五百弗は既に旅費に出してしまつたのであとの五百弗のあるうちに職を見つけねばならず」であつた。

「日本を出る時岩村教授から彫刻家フレンチ氏、マクニール氏にあてた紹介状を買つて此を唯一のたのみにしてゐたのですが、両彫刻家は慇懃に接待してくれたけれども、私を助手として雇はうといつてくれなかつた。……故郷から持つて来た二百五十弗許りの金は毎日減つてしまふ。金をとる道は無い。……其所に先達の白蠟燭之助君がアメリカの彫刻家にポオグラムといふ人が居て、非常に立派な作を博覧会に出した事があると私に話した。(彫刻を見て)是非会いたい気が燃上つた。……其晩私は思ひ切つて、淋しい寝台の上でポオグラム氏に手紙を書いた。……それで又考へて今度はフレンチ氏から紹介状を買つて夫を同封して、やつと力を得て投函することが出来た。(彫刻家ガットソン・ポオグラム氏)のである。そして首尾よくポオグラム氏の助手になることができた。遅給七ドル。五月から八月まで、紐育市西六五丁目一五〇番にある窓の無い天井裏の小さな部屋から、自炊しながら通勤した。「朝はトーストに紅茶、昼は十仙食堂で何か一皿、夜は近所のデリカ

ツセン店で豆やハムを少し買つて食べ、たまには近くの支那飯屋で、安いチヤプスイやフイヨントンタンを食べた。」生活であつた。

「当市美校の休暇後はポオグラム氏の助手彫刻室に日に研究」(紐育より六月十七日)、「秋より美術学校へ彫置と木炭画を」(同 九月六日)、「今日より美校」(来年の五月を以て終り申すべければ、此の一期を修めたる後今度はロンドンに向ふ筈に御座候」(同 十月一日)と。十月、アイトスチューデント リーグの夜学に入り、自費の苦学生生活をした。

一九〇七年、学校で翌年度の特待生に選考され、特別賞も受け、父光雲の配慮で農商務省海外実習生の資格を得て、月六十円の手当を得た。

学資は豊かではなく、ジャップといわれて、淋しさに耐え、精神的にも物質的にも余裕のない苦悶の毎日であつた。しかし、「私の精神と肉体とは毎日必ず「生れて初めて」のことを経験し、吸収した」のである。「毎日人間行動の基本的相違に驚かされ」「若々しい人間の気既にまづ気づき」「善意的強圧力に反撥を感じながら、……あけつ放しの人間性に魅惑された。」生活であつた。

「生まれて初めて日本の土地を離れて一箇月許りの心細い旅行の末紐育中央停車場の煤けた歩路に朝早く、一人ぼつちで吐き出された私は、急に遠くに居る父や母の事を思出して涙の流れるのに困つた程、まるで世間を知らない、学校で育つたばかりの二十四才のお坊ちゃんだったので、此からこのアメリカの繁華な都の激しい生活の中で、どう食を求めて、どう勉強したらいいか、まるで分らなかつたのです。……故郷の……どの位身にしみて恋しかつたか知れません。」とか「小生此までは故郷といふものを有たざりし身。今度此地に來りてはじめて故園のなつかしさを知り申し候。母をおもひ、父をおもひ候時は、実に涙のあふれ出づるをとどめあへぬ事に候。親といふも